

---

# 力の行方 ルーフェイア・シリーズ08

こっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

力の行方 ルーフェイア・シリーズ08

### 【Nコード】

N8569E

### 【作者名】

こっこ

### 【あらすじ】

権力、野心、交錯するさまざまな力。依頼を受けて任務に同行したルーフェイアたちの、見たものとは？．．心優しい美少女が繰り広げる、異色の学園ファンタジー第8弾 シリーズの第8作です。ここから少し路線が変わり、外向きの話が多くなります 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 携帯版は、1行毎の空行or改行です 現在、第15作「拙き者へ」を連載中

## Episode : 01 依頼

R u f e i r

「おい、ルーフェイア。さっきタシユア先輩たちがお前のこと、探してたぜ?」

授業が終わって教材を片付けていると、そうイマドから声をかけられた。

「あたしを……先輩が?」

ちよつとありえない話に、少し怖いような感覚を覚える。

「ほんとに……?」

「こんなことでウソついたって、じゃあねえだろ。つか伝言忘れた時の方が、怖いっての」

それは確かにそうだ。

けれどあたしが先輩を探しに行くならともかく、その反対があるなんて。

「食堂で待つてゐるつてたから、早く行つたほうがいいぜ?」

「……そうだね。そうする」

急いで机の上を片付けて、あたしは立ちあがった。教材がけつこ  
う重い。

「ルーフェイア、それ置いていきな。あたしが部屋に届けとくから  
見かねたんだろう、シーモアがそう言ってくれた。

「ありがと。えっと、じゃあ頼んでいい?」

「構わないさ。さ、早くいきな」

シーモアの好意に甘えて、手ぶらで教室を出る。

いつもと同じ光景。

中央部のホールへ続く渡り廊下を、他の生徒とすれ違いながら渡る。中には話しかけてくる生徒もいた。

「やあ、ルーフェイア。どこ行くんだい？」

「食堂までです」

誰だろう？ 上級生なのは間違いないけど、名前まで分からない。タシユア先輩なら全生徒を覚えているから、きっとわかるんだろうけど……。

「じゃあさ、俺も一緒に行くからなにか食べないか？」

「ありがとうございます。でも今、タシユア先輩に……呼ばれてて」とたんにその先輩の顔が引き攣った。

「た、タシユアってあの、タシユアかい……?!」

「えっと……タシユアって先輩、そんなにたくさん……いるんですか？」

あたしにはあのタシユア先輩以外、心当たりはない。

どうやらこの先輩もそうだった。

「悪いことは言わないから、止めた方がいいんじゃないか、行くの。いったい何をされることか……」

「でも、あの、タシユア先輩……いい人ですよ？」

この一言で、今度は先輩が石化した。口をぱくぱくさせたまま、何も言えなくなる。

どうしてだろう？

あたしがこう言うと、ほとんどの人が石化する。

ともかくこれ以上タシユア先輩を待たせて怒られるのも嫌なので、おいとますることにした。

「あの、名前は存じませんが先輩、失礼……しますね？」  
「あ、ああ……」

## Episode:02

昇降台を降りると、いつものようにひんやりとした風が駆けぬけた。

玄関に飾られてる水盤を、水が流れる音が響く。

はじめて見た時、不思議なくらいに澄んで見えたこの校内。その印象は、いまでも変わらない。

あれから、ちょうど1年。夢を見ているような気がする。でもその夢は覚めることがなくて、あたしを取り巻きつつけていた。

覚めませんように。

わかっていても、いつもそう願わずにはられない。

ある日目が覚めたらそこはやっぱり戦場で、これはぜんぶ夢。そんなふうになりそうで仕方がなかった。

これが夢じゃないと信じられるようになるまで、どのくらいかかるのだろう？

せめてこの学院を卒業するまで、このままでいられますように……。

そう祈りながら廊下を歩く。

もう何度となく歩いて慣れているはずなのに、それでも足元が浮いているような気がした。

廊下を曲がって、中庭へ足を向ける。

図書館、診療所、そして食堂。

傭兵学校のはずなのに、ここにいると戦場を忘れそうだ。

広くて清潔で小綺麗な食堂の中も、まさに平和だった。たくさんの生徒たちが、お喋りをしてる。

それをひととおり見渡して、あたしは先輩たちを見つけた。誰かにぶつかったりしないように、ゆっくり歩いてそっちへ行く。でも声をかけようとして、あたしは躊躇った。

先輩たちの周り、空気が違う。

踏みこんじゃいけない、そんな雰囲気だった。

時折交わされる言葉は少ない。でもそこに、絆が見える。

その一言一言、何気ない仕草。そんなところから互いへの思いやりが感じられた。

いいな、と思う。

父さんと母さんもそうだけど、こんな風にお互いに相手を信頼して、尊敬できるなんて。

穏やかに会話を続ける先輩たちが、見ていてとても羨ましかった。

いつかあたしにも、こんな風に話せる相手ができるんだろうか？

そんなことを考えながら、どのくらいぼうつとしていたのだろう。

「ルーフェイア。そんなところに立っていては、迷惑ですよ」

「あ、すみません」

さっそく先輩に注意される。

でもよく考えたら、呼び出したのは先輩だったような？

けどそう言ったところで、また怒られるだけだろう。

「ともかく座りなさい」

「はい」

向かい合わせに座る先輩たちの間に入る格好で、あたしも椅子にかけた。

気をつけないと、またいけないことを言って怒られそうで、ともかく落ちつかない。

「あの、お呼びだつて、聞いたんですけど……?」  
恐る恐る、タシユア先輩に訊いてみる。

## Episode : 03

「呼んだのは、私ではありませんよ」

「え??」

イマド、確かに「タシユア先輩が」って言ってたのに。  
でも怒られないところを見ると、タシユア先輩が全く無関係というわけでもないらしい。

首をかしげるあたしに、シルファ先輩が言葉をかけた。

「いや……呼んだのは私なんだが」

「えっ！ あたし……タシユア先輩が、って」

「ですから、私は呼んでいませんよ」

イマドったら……。

きっと彼のことだから、シルファ先輩から話を聞きながら、タシユア先輩だけ頭に残ったんだろう。

けどさいしょからシルファ先輩だとわかってれば、あたしこんなに、どきどきしなくて済んだのに。

「えっと、じゃあ、ほんとに……タシユア先輩じゃ、ないんですね?」

「ああ。私が呼んだ」

「やれやれ……また何か言われるとでも思ったのですか」

タシユア先輩の視線が冷たいけれど、とりあえずほっとした。シルファ先輩なら優しいし、ことあることに怒られなくて済む。

「それで、話ってなんですか?」

「仕事の依頼だ」

「？」

また混乱する。

シルファ先輩と違って、あたしは傭兵隊の受験資格さえ、満たしていない。だからあたしに、任務が回ってくるはずもなかった。

だいいち一般生のあたしが一緒に行ったりしたら、むしろ減点対象になるんじゃないだろうか？

話が飲み込めないあたしに困ったのか、シルファ先輩は助けを求めると、あたしにタシユア先輩の方を見ただけ、知らん顔をされた。

意外とシルファ先輩にも、厳しいんだ。

自分のことは自分で、つてとこなんだろうか。

「すまない、言葉が足りなかったな……」

「足りない、というレベルではないでしょう」

申し訳ないけど、こればかりはタシユア先輩に同意したくなる。  
「説明は簡潔に」とはよく言われるけど、簡潔すぎるのも問題だ。  
何よりシルファ先輩への依頼が、どうしてあたしと関係あるんだろう？

「その、なんだ、今回の任務で子供が必要なんだ」

「子供……確かにあたし、小さいですけど……」

なんか面と向かって言われると、ひどい言葉のような気がする。  
でも、否定できないところが……。

## Episode : 04

「いや、そういう意味じゃなくて……とにかく任務で、年齢的にル  
ーフェイアくらいの子がいるんだ」

「そうなんですか？」

ようやく話が見えてきた。頭の中で整理してみる。

シルファ先輩が学院から何か依頼を受けたのは、間違いなさそう  
だ。そしてその任務にはどうやら、子供？が必要らしい。

それでシルファ先輩、あたしに話を振ってきたんだろう。もしか  
するとタシユア先輩が、名前を挙げたのかもしれない。

「嫌なら、ムリにとは言わない。他をあたるから」

「いいえ、かまいません」

シルファ先輩から頼まれて、断る理由なんてない。

「　　すまない。きつとお礼はするから」

「あ、じゃあ、あの、ケーキが」

つい、そう答える。でも以前食べた先輩の手作りケーキ、そのく  
らいおいしかった。

「　　なんだ、そんなものでいいのか？」

「はい。先輩のケーキ、とつても……おいしいです」

「おやおや、欲のないこと」

タシユア先輩は呆れてるみたいだけど、あたしはお金よりもこっ  
ちのほうがいい。また食べられるかと思うと嬉しくなる。

「　　どんなケーキがいいんだ？」

「えっと、あたし、よく知らなくて……。でも、白いのがいいです」

「白いの……生クリームか？」

「え？ ケーキって生なんですか？」

あれ？

先輩たちが沈黙しちゃった……？？

「ええと……ケーキが生なんじゃなくて、クリームが生なんだ」  
しばらく間を置いて、そうシルファ先輩が言う。

「生で食べて、平気なんですか？」

おなか壊さないんだろうか？

？

なんかシルファ先輩、引き攣ってるような？

それにタシユア先輩、露骨にまなざしが冷たい……？？

そして銀髪の先輩は一言。

「どうやら学院では、一般常識も教える必要があるみたいですね」

「……す、すみません」

どうもあたし、世間一般からかけはなてれるらしい。

もちろんこれじゃいけないと思って、いちおう勉強？はしてる。

けど世間って奥が深くて、なかなか覚えられないでいた。

やっぱりあたしあのまま、戦場にいたほうが良かったんだろうか？

ため息が出る。

「まあ、少しずつ覚えれば大丈夫だろう。私も教えるから。」

ところで詳細を少し詰めたいから……場所を、移動したいんだが」

「あ、はい」

シルファ先輩に慰められながら、あたしは一緒に食堂を出た。

## Episode:05

Sylpha

どこへ移動しようかと思ったが、結局自分の個室へと向かった。  
ここならばまず、他の生徒に聞かれる心配はない。

女子寮2階の一番奥      上級生の資格持ちは低い階が多い      へと向かう。

「あたしこの階……入ったの、初めてです……」

雰囲気はどこか違々と、ルーフェイアは落着かない様子だった。  
一方でタシユアは平然としたものだ。だいいち彼の場合、自分が女子寮にいることさえ気にしていないだろう。

もっとも個室を持つくらいになると、もともとこの手の事に関しては、けっこう緩やかなのだが。

それにしても、ルーフェイアが任務同行を承諾してくれて良かった、と思う。そのへんの上級隊を上回るのではないかという彼女なら、戦闘能力等に申し分はない。

正直、これで断られたらやっかいだとは思っていたのだ。彼女ほどの戦闘能力を持っていて私が良く知っている女子となると、他に思いつかない。

ただルーフェイアの場合、一般常識には不安があるが……。

戦場育ちだという噂は聞いているのだが、それにしても疎すぎる。普通はもう少し、知っていても良さそうなものだ。

これできちんと、任務がこなせるのだろうか？

一抹の不安を覚えるが、当人はそれほど気にしていないようだった。

「それで先輩、任務って…… どのようなですか？」

部屋に入り私がドアを閉めたたん、無邪気な調子で訊いてくる。さすがというべきか、これからの任務に対して「怖い」といった感覚は持ち合わせていないようだ。

「いちおう、要人の警護だ。といっても、相手は子供なんだが」

「あ、それであたしが…… でもそれじゃ、けっこう大変ですね？」

「そうだな」

警護というといわゆる警備員を思い浮かべるが、そんな単純な話でわざわざ、シエラの上級傭兵を雇ったりはしない。つまりは守られるべき要人に、かなりの危険が予測されるということだ。

これを24時間続けて守りきらなければならないのだから、精神的にも肉体的にもかなり厳しい。

その点を、ルーフェイアも心配したようだった。

「今回はタシユアも居ないから、人数を増やすつもりだ」

「え？ タシユア先輩が……？」

意外、といった表情で少女が訊いてくる。

まあ確かに、わたしとタシユアがペア、というのがいつものパターンだが……。

## Episode : 06

「私は今回は参加しませんよ。クライアントの意向で、女性がいいそうですから」

見た目は普段と変わらないが、そう言うタシユアの口調には、蔑みが混ざっていた。なにかそれなりの理由があるならともかく、こんな風に男女を区別するのを彼は嫌う。

「まあ、それほど複雑な任務ではありませんから、大丈夫だと思いますがね」

いつもの憎まれ口。

一瞬ルーフェイアがなにか言いたそうにしたが、それを私はとどまらせた。またいらぬことを言っ、タシユアに泣かされるのも可哀想だ。

「上級隊からあと一人くらい、学園長にお願いしようとは思っているんだ。

それにできればルーフェイアのクラスから誰か、連れて行けるといいんだが」

「そうですね。シーモアなんか、きつといいと思います」

そう言うルーフェイアの横顔を見て、私は「おや」と思った。

いつものにこやかな表情は変わらない。ただ雰囲気、どこか違うのだ。

「それで任務地はどこですか？ 場所によつては、あたし心当たりがあります。

それに警護って言っても、服装なんかもそれなりに用意しないといけないんじゃないでしょうか？

あと武器の携行も、けっこう制限されますよね？」

矢継ぎ早の質問。これには私もあっけにとられた。

これほど察しがいいとは。

見ればタシユアは、面白がっているような表情だった。

「場所は……アヴァンだ。クライアントは、アヴァン公国継承権第1位の王太子。だが実際に警護するのは、第2位になるその息子だな」

さっき聞いてきたことを伝える。

海を越えた隣国、アヴァン帝国が瓦解後できたこの公国は、シエラ学院のお得意様だ。土地と人は多くないが、金融立国でお金だけはある。そういう条件を上手く使って、軍事関係のかなりをシエラに外注している、珍しい国だった。

「服装の指定はないな。ただ昼間は、クライアントの学校の制服で、支給されるそうだ。

ただ武器は確かに 制限されるだろうな」

「そうですか。でも校外だと私服になりますから、用意した方がいいような気がしますし……」。

武器の方は、いろいろ対策を練らないと、きっとダメですね」

先ほど「ケーキが生」などと、妙な質問をしていたのとは大違いだ。

「あと、情勢はどうなってますか？ 追加で依頼がきている以上、そんなに平穏じゃないと、思っんですけど……」

「情勢は、未確認情報だが、過激派の動きが活発化しているらしい。アヴァンの諜報部は、建国祭を何らかの形で狙っていると、にらん

でるようだ」

本当にこの少女は、外見だけで判断できないと思い知らされる。  
そんなルーフェイアに多少戸惑いながら、私はこの子相手に、詳細を詰めていった。

## Episode:07

R u f e i r

シルファ先輩の個室で詳細を詰めてみると、けっこう厄介な任務だった。

まず警護する相手というのが、アヴァン公国の王子。しかも、過激派が動いているらしい。

これだけだつて十分厄介なのに、この王子を通っている学校まで含めて、フォローしなくてはいけないという。

せめてもの救いは、アヴァンの建国祭までで、期間が短いことだろうか？

屋敷にこもってれば、問題が少ないのに。

おおっぴらな警護ならともかく、こういう隠密の任務じゃ目立つ武器の携行もできない。あたしの太刀だつて微妙だし、シルファ先輩のサイズ（大鎌）は間違いなく無理だろう。

これがいちばん厳しかった。あたしも先輩もサブの武器を持っているし格闘技も使えるけれど、戦闘能力の低下は避けようがない。

「魔法と精霊が頼り、ですね」

「そついうことになるな」

けど魔法つて、意外と小回りが利かない。威力が大きくなればなるほど、容赦なく周囲を巻き込んでしまう。

精霊にいたつては、言うまでもなかった。

「ともかくここで言っても仕方がない。手持ちでやりくりするしかないだろう」

「ですね。 あ！」  
「ん？」

あたしが小さく声を上げたから、先輩は不審に思ったみたいだ。

「どうしたんだ？」

「ええとその……同行する人数、増やしませんか？ あと1人が、2人くらい……」

ちよつと説得できるか自信がないけれど、とりあえず言ってみる。

「そのくらいなら大丈夫だろうが……なにかいい考えでも？」

「ナティエス、呼びたいんです。あとできれば、ミルも」

「ミル……あの、ミルか？」

案の定、シルファ先輩の顔色が変わった。タシユア先輩も呆れた顔になる。

「ナティエスはともかく、ミルドレッドなど連れていってどうするのですか？」

かき回された挙げ句、任務に失敗しそうですがね」

いつもながら厳しい。でも今回は、この2人を連れていった方がいいような気がした。

ナティエスはああ見えて、いろいろ特技がある。とくにシーモアがいれば、スラム出身同士で目立つことなく、様々なことをやってのけるはずだ。

そしてミルは……。

「ミルは、アヴァンをよく知ってます。地理的にも、情勢的にも。ですから、一緒に行ってもらった方がいいと思うんです」

現地を知っている人間がいるのといないのでは、そうとう状況

が違ってくるはずだ。

## Episode : 08

「本当なのですか」

「はい」

嘘みたいな話だけど、ミルは本当にアヴァンに詳しい。まえに住んでたらしくて、細い裏道まで知ってるほどだ。当然あたたちの付け焼刃の知識なんて、足元にも及ばない。

あの調子で、他のこともやってくれるといいのに。

そう思うほど、これだけは見事だった。

まあだからといって、かき回されない保証はないのだけど……。

「ルーフェイアがそこまで言うなら、彼女も連れていった方がいいんだろうな。」

そうするとあとは、誰か上級隊から1人……」

言ってシルファ先輩が考え込む。

確かにこの人選、間違えると大変だ。あたたち下級生はともかくとして、一緒に仕事を進める相手との相性が悪かったりしたら、できるものまで失敗しかねない。

けど、ロア先輩はまだ資格がないし……。

「エレニアあたりが、いいかもしれませんね」

黙ってしまったあたしたちに、タシユア先輩が言った。

「エレニア？ 春に私たちと一緒に合格した、彼女のことが？」

「他にこの学院に、エレニアという名の生徒はいませんよ。」

若干15歳で、経験はやや不足ですが、彼女なら上級隊の中でも優秀な部類に入るはずですよ」

タシユア先輩、自分もいちおう同い年なのは棚に上げて、冷静に指摘する。

でも、言っていることは間違っていない。

上級隊は普通の傭兵隊と同じで、受験資格は「満15歳以上」。  
でも実際には、この年で昇格するのは至難の技だ。

だけどその離れ業をタシユア先輩とエレニア先輩、やってのけている。

いろいろな事情がありすぎるタシユア先輩はまだともかく、学院へ来る前はまあ普通にしたらしいエレニア先輩は、つまり相当優秀ってことになるだろう。

「在學生に回ってくる任務では、教官に相手を頼むわけにはいきませんし、主だったメンバーは今回の建国祭に出ていますし。

彼女なら女性ですから、クライアントの意向にも沿うでしょう」

「そうだな」

シルファ先輩がうなずく。

あたしもこの話は、けっこう嬉しかった。ロア先輩ほどじゃないけど、エレニア先輩のことはよく知ってる。文句なんてあるわけなかった。

「えっと、じゃあ、あたし……訊いてみます。ロア先輩に聞けば、どこにいるか、すぐわかりますから」

「いやでも、そのくらいは自分で頼まないと……」

シルファ先輩、意外とこういうところはきっちりしてるみたいだ。



## Episode : 09

「あ、そしたらとりあえず、ここまで来ていただいたら……どうでしょう？ シーモアたちに知らせるついでに、探してきます」

あたしがこう言つと先輩、少し困つたような表情になった。となりのタシユア先輩を気にしているみたいだ。

けど銀髪先輩は、黙つたままだつた。シルファ先輩がどうするか、面白がつているらしい。

しばらくして、やつとシルファ先輩が言つた。

「そうしたら……頼んでもいいか？ 細かいことは全部、私から説明するから」

「はい！」

いつも面倒をみてもらつてばかりだから、先輩の役に立てるなんてすごく嬉しい。

このまま寮でロア先輩探して、そのあとみんなを集めればすぐだろう。それからもう一度詳細を詰めれば、けっこう早いうちに出発になりそうだ。

そんなことを考えながら、あたしはみんなを探しに出た。

ロア先輩はすぐに見つかった。今朝言つていたとおり、部屋で魔視鏡の改造をしていたのだ。

「あ、ルーフェ、ちょうどいいところに。ちょっとそっちの石、取ってもらえる？」

「これですか？ いったい何に……？」

「うん、ちよつと通信速度、上げられないかなつてね」

下がらないといいけど……。

魔視鏡は、魔法の呪文の要領で行動パターンを幾つも書き込んだ石を、何種類も組み合わせさせて動かす。とうぜん石と書き込まれた手順が多ければ多いほど、出来ることは多くなる。

ただいろいろと石によって特徴があるし、手順も組み合わせを間違えると逆効果だ。だから、上げるつもりが下がった、なんてことも多かった。

そんなことを思いながら見ている間に、ロア先輩、手際よく組み上げてフタを閉める。

「さ、これで上手く行けば、やりやすくなるはず」

「そうですね。　　って、いけない」

うっかり大事なことを、忘れるところだった。

「ロア先輩、エレニア先輩……どこにいるか、知りませんか？」

「エレニア？　今日は診療所の手伝いつて言ってたけど………どうかしたの？」

不思議そうなロア先輩に、簡単に事情を説明する。

「なるほどね。でもルーフエなら大丈夫だよ。

じゃあこつちも一段落したし、一緒に捜しに行つてあげようか？」

「あ、はい、助かります」

ほんと、ロア先輩は頼りになる。

2人で急いで部屋を出た。

「準備とか大丈夫？　いろいろあるって、エレニアがよく言ってるけど」

「いちおう……慣れてますから」

太刀一つで戦場、なんていうことまであった。それに比べれば、

準備をできるだけマシだ。

## Episode:10

「そっか、でもそうだよねえ。ほんとルーフェ、すごいところに居たんだねえ」

そんな話をしながらロア先輩と歩く途中、食堂の前であたしは思いついた。

「あの、先輩、食堂……寄っていいですか？　なんかシーモアたち、いるような気がして……」

「うん？　いいよ、行つといで。そしたらその間に、ボクはエレニア呼んでくるからさ。」

シルファ先輩の部屋へ、直行でいいのかな？  
「はい」

じゃね、そう言ってロア先輩は、すぐ向こうの診療所へ歩いていく。

あたしは折れて、食堂へ入った。  
いつものメンバーはすぐ見つかった。予想通り奥でおやつを食べていたのだ。

なんでこんな時間に食事するのかは、わからないのだけれど。

近づくと、先にシーモアが声をかけてきた。

「ルーフェイア、もう先輩との話は終わったのかい？　どうやら泣かされなかったみたいだけど」

「そんないつも……泣いたり、してないもの……」

あたしの言葉に、みんなが笑いだす。

「だってルーフェイア、よせばいいのにいつもわざわざ、タシユア先輩の所へなんか行くんだもの」

「けど先輩、いい人だから……」

「はいはい。で、もう時間空いたのかい？」

それならどこかへ出ようか、そうシーモアが視線で訊いてくる。

「ごめん、それが、すごいことに…… なっちゃって。えっと、さっき先輩に呼ばれた話、なんだけど……」

それからかいつまんで、話の内容を説明した。

とたんにみんなの表情が輝く。

「ふうん。じゃあそれに、あたしたちも付き合っわけだ」

「あ、えっと、イヤならムリには……」

「そんなことないわよ。楽しそうじゃない？」

「そうそう。任務なんて、カッコいいよね」

シーモアはともかく、ナティエスとミル、分かっているんだろうか？　ちょっと不安になる。

でも、この2人に来てもらった方がいいのは確かだし……。

「それでね、シルファ先輩…… 部屋で、待ってるんだけど……」

「あ、そうなんだ。じゃあすぐ行ったほうがいいね」

シーモアが立ちあがった。ミルとナティエスも、急いでケーキを食べ終えて席を立つ。

「いつ出発なんだい？」

「それはこれから、決まる…… かな。それより多分、いろいろ準備…… あると思う」

「そうだね。まさか手ぶらってわけには、いかないし」

連れ立って食堂を出た。

あまり声が大きくならないように気を付けながら、みんなで話しながら歩いていく。



## Episode : 11

「アヴァンか」。あたしもう、2ヶ月くらい行っていないなあ」

「え、そんなに行ってるの？」

「そういえばミルって寮生活じゃないから、休みの日にどうしているのか、あたしたちそれほど知らなかった。」

けど「もう」2ヶ月くらいなんて彼女、よほどアヴァンに縁があるんだろう。この点だけは心強い。

他が心配だけど。

そうこうするうち、あたしたち女子寮の2階まで来た。さすがになんとなく気圧されたんだろう、ナティエスが黙る。

もつともミルは相変わらずだ。

「ねえねえ、それで“くらいあんと”って？」

「もう、それをこれから、シルファ先輩に訊くんじゃない」

こんなことを平気で言っちゃうんだから、ミルの神経ってどうなってるんだろう？

半分呆れながら、シルファ先輩の部屋の近くまで行く。

あれ？

遠目に、ほんの少しドアが開いているのがわかった。

もしかしてあたしたちが入りやすいように、開けておいてくれたんだろうか？

と、かすかに話し声が聞こえた。

さて、私は行きますね。

タシユア……。

私がいると余計なことを言うでしょうし、それにエレニアはいづらいでしょからね。私の意見よりも、全員で意見を出し合ってよく考えなさい。

先輩たち……。

「どしたの？」

立ち止まってしまったあたしに、みんなが声をかけてきた。

「あ、ごめん。」

あのね、えっと、みんな武器、もってる？ いちおう先輩に、見てもらったほうが……」

「言われてみればそうだね。じゃあ先に部屋へ戻って、取ってこようか」

シーモアたちが納得して、いったんここから離れた。

よかった。

とっさだったけど、いい言い訳だったと思う。

2人で話しているところにみんなで押しかけたら、迷惑なことこのうえなしだ。

そしてあたしは、先輩の部屋へと向かった。先に行って、すぐミルたちが来るのを、伝えておこうと思ったのだ。

ほんの少し開いたドアに、手をかけかける。

あ。

「シルファ」

タシユア先輩が、ダガーを手渡す。

「持っていきなさい。それなりの物ですから、役に立ちますよ」

たったそれだけだけど、どれだけシルファ先輩のことを思ってるかすごく伝わってきた。

涙がこぼれそうになる。

絶対この任務、成功させないと……。

そうして立ち尽くしていると、不意にドアが開いた。

「ルーフェイア、こんなところで何をしているのですか  
いつもと同じ声と表情。

でも……。

「先輩」

「なんです」

どうしても、言わずにはいられなかった。

「きっと、きつとみんなで、戻ってきますから」

「失敗するなどは、思っていないですよ」

これは、シルファ先輩への信頼だろうか？

あたしが意味を計りかねている間に、銀髪の前輩は立ち去った。

## Episode : 12 任務

R u f e i r

シルファ先輩から話を聞いた4日後、あたしたちはアヴァンにいた。アヴァンシティ郊外のある邸宅で、クライアントと顔合わせ、ということになっていたのだ。

けどケンディクからこの日程って、かなりの強行軍だ。

アヴァンへは、首都のイグニールからなら、わりとすぐだ。海を渡れば翌朝には着く。

ただ学院のあるユリアス国、大陸国家なのもあって、ケンディクから首都までが遠い。ふつうのペースで行ったら、3日はかかる。それをどこかへの宿泊なしでひたすら移動して、2日ほど短縮した。

でも緊張してるみたいで、シーモアもナティエスも、疲れたようすは見せてない。

「ふむ、これがシエラ学院がよこしたメンバーか」  
クライアントの第一声は、それだった。

「子供ばかりではないか？ これで本当に、ローウエルの警護など勤まるのかね？」

「お言葉ですが、シエラ学院の傭兵隊の優秀さは、アヴァンの方ならよくご存知ではありませんか？」

思わずむっとしていたあたしたちの気持ちを、エレニア先輩が代弁した。

「それに普段でしたら、私たちもこんな幼い子たちを、危険な任務に連れ出したりしません。ですが今回は、そちらの要望に従いまし

たので」

見事な切り返しに、クライアントのおじさんが黙る。毒舌で知られるタシユア先輩と、いい勝負かもしれない。

「……私を、誰だと思っているんだ？」

「アヴァン神聖帝国の末裔、現アヴァン公国王太子、エイヴリー」  
ホルスナー」ド」ファレル卿と伺っておりますが。違いましたか？」

やっと言ったクライアントの恫喝にも、エレニア先輩は一步も引かなかった。

けど、このまま放っておいていいんだろうか？ あんまり陰悪になると、あとの任務に響きかねない。

（先輩）

シルファ先輩の上着の裾を、そっと引つ張る。

（止めた方が、いいんじゃないでしょうか？）

（そうは思うが、いったいどうやったら……）

確かにそうかもしれない。こんなやりとりに口をだすの、誰だつて願ひ下げだ。

でも、このままってわけにはいかないだろうし……。

その時、うまい具合にドアが開いた。エレニア先輩とクライアントとのやりとりが止まる。

「父上、お呼びですか？」

ひとりの少年が入ってきた。

年は、あたしたちより少し上だろうか？ 赤みがかった茶色の髪に、薄い水色の瞳をしている。

たぶん彼 おそらく名前はローウェル が、今回の警護の相

手なんだろう。

## Episode : 13

でも、ほっとしたのはつかの間だった。

「ああ、例のシエラの連中ですか。女性ならと思いましたか、やはり野蛮そうですね」

そう言いながら、殿下があたしたちを一瞥する。

一瞬あたしを見たような気がするけど、それを気にしてる余裕はなかった。みんなが、言われたことに怒ってるのが分かる。

シーモアなんて相手がクライアントじゃなかったら、まちがいに殴り倒してるだろう。

「いずれにせよ、下々のしかも孤児の集団では、仕方ないんでしょね。」

まあともかく、あまりみつともない真似だけはやめてもらいますよ。こちらの品位に関わりますから」

この少年、お父様より凄いかもしれない。

見ればみんなは切れる寸前だ。でもさっきだって止められなかったのに、どうやってたらいいんだろう？

そこへ、ミルの能天気な声が響いた。

「ふうん、じゃあ殿下つてさ、血が青かったりするんだ？」

ふわりとあたしたちの前へ出て、とんでもないことを言い放つ。

「な、なんだと……」

「え？　だってそうじゃない　上の人たちってあたしたちとちがうんでしょ？」

そしたらさあ、血の色が青かったりとか、実は目がもうひとつあったりとか、するんだよね？」

無邪気な毒舌……とでも言うんだらうか？

にこにこしながら言う様は、まるで小さな子が尋ねているようだ。それなのに、しっかり相手の急所を突いている。

「おつもしろいよね、あたし初めて知っちゃった」

この親子が相手じゃ、どうなるか。でもミル、そんなことまったくおかまいなしだった。

「ゆ、由緒ある我々を、まるで化け物のように……！」

「あれ？ ちがったんだ？ んじゃあたしたち下々といっしょ？  
へえ、そっかあ」

ある意味、タシユア先輩以上かも。

「けどさあ、あんまり言わない方がいいよ」。

これでみんなに嫌われちゃったりして、任務がうまくいかなくて死んじゃったりとかしてさ。でも、自業自得だもんね？」

とどめの一言。

さすがのクライアントも、今度ばかりは黙ったままだ。なにしろミルの言っていること、あれでも一理ある。

「でさ、あたしたちもう、行っているんだよね？ だって顔合わせ、おわったんだもん

ねえ、みんな行こ。あ、お部屋まで誰かつれてってくれるんですよ？ テキトーに決めちゃってもいいけど」

あたしたちも含め、部屋にいた一堂全員、啞然とするばかりだった。

その中をミル、さっさと部屋を出ていく。

「ねえほら早くう。お部屋決めて、ゆつくりしようよあ」  
部屋を決めるって、ホテルじゃないと思うけど……。  
ともかく完全に、みんなミルのペースに巻き込まれてた。勢いに  
引つ張られるようにして、あたしたちも部屋を出す。

## Episode : 14

「あ、ねえねえ、その執事さぁん。あたしたちシエラ学院から任務で来たんだ。

でね、お部屋、どこ行ったらいいの？」

天衣無縫もここまできると、そうとうの威力だ。呼びとめられた執事？も、不審に思うより先にミルの質問に答えてる。

「シエラ学院の皆様ですか？ 少々お待ちください。すぐにご案内しますので……」

「ありがとう」

なにがなんだか分からないまま、気が付くとあたしたちは、割り当てられた部屋にいた。

ちなみに由緒正しい家柄だけあって、調度品なんかはどれも一級品ばかりだ。

「この続き3部屋を、どうぞお使いください。それからなにか御用がおありでしたら、こちらの呼び鈴を……」

「はい じゃあまたよろしく」

ミル、ウインクひとつで執事？を追い出す。

あまりの展開に、みんなしばらく呆然としたままだった。

しばらくしてからようやく、シルファ先輩が口を開く。

「今のうちに……いろいろ点検した方がいいんだろうな……」

「そうですね」

才媛で知られるエレニア先輩も、やっぱりいつものペースがない。

「ええと……とにかくお嬢さんたち、荷物出してみて。ほらミル、妙なことをするんじゃないの」

エレニア先輩、ロア先輩以上に面倒見がよさそうだ。あたしたちの荷物を、ひとりひとり点検していく。

「シーモアは問題なさそうね。ルーフエイアは……これだけ？」  
「はい」

あたしはほとんど、荷物は持ち込まなかった。着替え以外は武器と、自分用にアレンジしたツールキットだけだ。

「驚いた。これで済ませられるなんてあなた、じつは慣れてるんじゃない？」

エレニア先輩、鋭い。

あたしがシュマーの人間で尚且つ戦場にいたことは、知っている人はみんな黙ってくれてるけど、これじゃばれてしまいそうだ。

どうしよう。

今までだって学園長やらロア先輩やらタシユア先輩やら、そうとう知られてしまってる。これ以上知られたら、学院を退学することになりかねない。

「ええと、その……」

どう答えていいのか困り果てて、あたしが口籠もっていると、横から助け舟が入った。

「エレニア。こみ入ったことには、立ち入らない方がいい」

「こみ入ったこと、ですか……？」

まだどこか訝しげなエレニア先輩に、こんどは嬌声が振りかかる。

「せんぱい、そんなのいいから、あたしの、あたしの……！」  
「ミル……」。

けどこれ、もしかしてわざとやってくれてるんだろうか？

ともかくこの騒ぎで、エレニア先輩の注意がミルへ移った。

## Episode : 15

「はいはい、しょうがないわね……なにこれ。なんでこんなに、お菓子が入ってるのよ」

「先輩もどうぞ」

お菓子って……。

それにしてもミルのこのペース、太刀打ちできる人間いるんだろうか？

彼女を連れてきたの、間違いだったような気がしてくる。でも彼女ほどアヴァンに詳しい子は、そうそういないし……。

ともかく大騒ぎをしながら、30分ほどでチェックを終えた。

「シルファ先輩、どうやら問題なさそうです。余計なものを持ち込んだ人がいましたけど、不足はありません」

「ぶう」

まさに絶妙のタイミング。ミルのブーイングに、思わずみんな笑い出す。

「すねるんなら、持ってくるんじゃないよ」

「ひつどおい、どうせみんな一緒に食べるくせに」。いいもん、あげないから！」

あげないって、いったいいつ食べる気なんだろう？

ともかく、付き合っているとひたすら話が進まない。だからあたし、自分で訊きたかったことを切り出した。

「あの、シルファ先輩。この後のスケジュールって、変更……ないんですか？」

「今のところは、そうだな」

「そうですか。えっと、そうすると……？」

ざっと頭の中で、覚えているスケジュールを点検する。

クライアントとの顔合わせは、無事(?) 終わった。あとは今夜、先輩たちが警備担当と直接会って詳細を詰めて、明日から本格的な警護だ。

もっとも建国祭までだから、1週間くらいだけだ。

当然だけどここの建国祭、アヴァンの年中行事だ。で、そのたびにシエラから傭兵隊が派遣されてる。ただ今年は革命派(?) がうるさいらしくて、急遽「開催前も」ということになったらしい。

しかもなんだか子弟の方まで危ないとかで、あたしたちが追加で雇われることになったと、シルファ先輩は言っていた。

それにしても。

アヴァン政府ってそんなにお金あるんだろうか？ 余計なことだけど、ちよつと心配になる。

シエラの傭兵隊は、案外単価が高い。世界中に散ってるシュマーの傭兵連中を適当に雇ったほうが、間違いなく安上がりだろう。

まあ他所のことだから、考えたってしょうがないんだけど……。

「先輩、間違いなく武器を、学校へ持ちこめるんですね」

「ああ、大丈夫だ」

シルファ先輩がきっぱりと答えて、シーモアがほつとした表情になる。

「それ聞いて、安心しましたよ」

見れば彼女、もう武器の手入れを始めてた。わりと新しい型の短銃と、投擲用のナイフが並べられてる。

シーモアはスラム育ちのせいか、小回りの効く武器が好みで、格闘とナイフと短銃とをうまく使い分ける。ついでに言つと手元にあるものならなんだって武器にしまふから、相手にすると予測がつかなくて、けっこう大変だった。

## Episode : 16

「あ、あたしも」

なにか「あたしも」かは分からないけれど、ミルもバッグから武器を引っ張り出した。

「それ、ふつうの小銃じゃない……よね？」

「あれ、ルーフェ知らない？　これね、かなりの数連射できるヤツなんだ。試作品、ちよつともらつてきちゃった」。

あ、でもね、いつもの小銃も持つてるよ」

「……………」

ミルって……本当にわからない。

なんだか頭痛を覚えながら、あたし今度は後ろへ振り向いた。

「ナティエスは？」

「あたしは、砥いどいたもの。でもいちおう、見といたほうがいいかな？」

彼女も武器を取り出した。あまり見かけない、諸刃の手のひらサイズの刃物だ。

たしかあたしの太刀と同じで、東方でよく使われてたもので、苦無って言ったと思う。こういった隠密行動にはシーモアの武器と並んで、かなり有効だろう。

「ほんとに毒塗つとくんだけど、まだいいだろうし」

ナティエスも見かけによらず凄ところがある。そういえば、彼女これで、スリの名人だとも聞いたし……。

もしかして芸が無いの、あたしだけなんだろうか？

ちよつと、ショックかも。

なんとなく落ちこんでいると、エレニア先輩があたしたちに声をかけた。

「はいはい。じゃあみんなここで武器の手入れをして、そのあと食事に行きましょうね。」

先輩、これでよろしいですか？」

「ああ、すまない」

リーダーのシルファ先輩が短く答えて、夕方の行動が決まる。

「あ、じゃあさ、みんなで食べにいこ？ あたしね、いいお店知ってるから」

「……ねえミル、もしかしてあたしお金、あてに……してる？」

ミルのはしぎぶりにイヤなものを感じて、問いただしてみる。

「そりゃもちろん。だってルーフェイア、お金持ちじゃない あたしたちが高級レストランでちよつと食べたって、どうってことないでしょ」

「それは……そう、だけど……」

けど、なんか毎回おごらされてる気がする。

「はいじゃあきまり」 さ、どこにしようかな」

当然だけど、ナティエスもシーモアも止めてくれない。それどころか彼女たち、一緒になって地図を見てる。

「エレニア先輩、止めてください！」

「あら、いいじゃない。どうせ学院からも経費が出るんだし。それに自由に外へ出られるの、きつと今日だけよ？」

「そついう問題じゃ……」

確かに警護が始まれば、自由な時間なんて殆どなくなるけど、だからって……。

それにいくら経費が出ると言っただって、そんな高いところで食べたら全額はムリだ。そのとき誰が差額を払うのか、あんまり考えたくなかった。

「シルファ先輩！」

最後の頼みの綱で、黒髪の先輩の方へ振り返る。

「私は、食べられればあとは、気にしないが」

「先輩……」

結局その日は、許可がでたこともあって、町の下見と称してみんなで外へ食べに出た。

## Episode:17

N a t t i e s s

なにあれ！

これ、あたしの殿下とやらを見たときの、第一印象。

何考えてるか知らないけど、あたしたちつかまえて「野蛮」だなんて。いったいどこに目がついてんだろう。

けどそうかと言って、任務手抜きするわけにもいかないし。

ただ任務自体はそれほど、難しくなかったのよね。24時間の警護だっというから、もうちょっとハードかと思ってたんだけど、わりとたいしたことないの。

朝起きてガッコ行って、あたしたち4人が同じクラスでまあくつついてて、あとは帰ってきて周囲固めてるくらい。

夜も3組2人で3時間づつ交代だから、思ったより楽。もっともいちばんやな時間は、ルーフェアとシルファ先輩が、買って出してくれたんだけど。

それにしても授業、学院以上につままないし。

あらら。

またルーフェアが、お嬢さんたちにかまれてる。

あたしたちもそうだったから、あんまり人のことは言えないんだけど。ともかくあの子って目立つせいか、どうもいじめられるみたい。

「シーモア、行こっか？」

「ああ」

2人で席を立つてみて。

行ってみるとお嬢さんたちが、なんやらかんやらルーフェイアを中傷してたの。しかも彼女ったら、優しいから言い返しもしないし。

「あんたたち、それつきやすることないのかい？」

こーゆー権力を嵩にきたようなことが大っ嫌いなシーモアが、いきなり辛辣な言葉をぶつけて。

「貴族だかなんだか知らないけど、ガツコの勉強もロクに出来ないくせに、エラぶるんじゃないよ」

「あらシーモア、頭が悪いからこーいうことするのよ。お利口な人はこんな真似、しないでしょ？」

あたしもこーゆーのキライだから、つい口調がきつくなっちゃうけどほんと、この人たちバカなのよね。あたしたちがとっくの昔に終わったような内容で、頭ひねってるんだもん。

ついでに言っと、体育なんかも呆れるほどダメだし。

「ど、どこの馬の骨ともわからない人に、そんな風に言われる筋合いありません」

「そうですね。何より私たちは由緒ある、神聖アヴァン帝国から続く血筋なんです。いっしょにしないでください。

だいいちあなたたち、まともなアヴァン語も使えないじゃないですか」

「それで？」

お嬢さんたち、ほんっとバカ。シーモアがこんなので、動じるわけないじゃない。

「言葉が出来ればエライってんなら、どこその言語学者の方が上だろっね。」

血筋？ それがどうしたのさ。 2000年も遡りゃ、あんたたちだって馬の骨じゃないのかい？」

うーん、いつ聞いてもさすが このキレがいいのよね。

ちなみにお嬢さんたち、絶句。

ちようどいいから、あたしも乗ってみたりして。

## Episode : 18

「シーモア、その辺にした方がいいよ。このお嬢さんたち口で言うわりには、”庶民の”あたしたちと同じにしか、喋れないみたいだもの。」

適当にしてあげないと、きっとショックで心臓麻痺おこしちゃう」

学院の生徒なんてみんな、数か国語喋ってあたりまえなんだけど。あたしだって、3つや4つは喋るし。ルーフェイアなんてもつとすぐくて、出来ない言葉の方が少ないの。

「あなたたち、なんの権利があつて」

「権利？んなもの、あんたたちだつてないだろうに」

シーモアつては険悪

けどこの面白いイベントも、何かがぶつかるみたいな音が、遮っちゃったの。

「なんだ？」

シーモアと一緒に、窓から外を覗いてみて。

「事故……？」

見えたのは、学校の塀に突っ込んでる車だった。かなりの勢いだつたみたいで、前のあたりがひしゃげてる。

話が聞こえたみたいで、殿下も他の女子も、窓へ寄ってみんなで野次馬。

「でもなんだつて、こんな場所に？」

そこへ、ルーフェイアの鋭い声が響いた。

「ダメっ、下がって！伏せて！」

「どうしたっ！」

教室の外で待機してた先輩たちが飛び込んできて、一瞬で状況掴んだみたいで、殿下を引き倒して覆いかぶさる。

そしてルーフェイアの動きは、もっとすごかった。呪文を唱えながら、お嬢さんたち突き飛ばす勢いで前へ出る。

「エレメンタル・ブレス！」

誰でも知ってる、でもホントに使える人は少ないレア呪文。ほんの短い間だけど、いろんなダメージをシャットアウトしてくれる。

けど、どうしてこんな呪文？

そのとき、窓ガラスが割れたの。飛び込んできたのは、どう見たって砲弾が二つ。それがごろっと、床に落ちて転がる。

気がついたお嬢さんたちが、一斉にパニック起こして悲鳴あげて

でも。

「不発？」

そうじゃなかったら今ごろ、大惨事になってるはず。

「今のうちに！」

ルーフェイアの警告。ただ今度はお嬢さんたちも分かったみたいで、教室の外へ我先に逃げ出して。

「シーモア、ナティエス、殿下を頼む！」

「あ、はい！」

シルファ先輩に言われて、あたしたち慌てて殿下と一緒に部屋を出る。

「先輩、あそこです」

「そうらしいな。報告して人を回してもらおう」

ルーフェイアとシルファ先輩の会話が、背中から聞こえた。  
ってよく見たら、殿下青ざめちゃってるし。

## Episode : 19

「大丈夫ですか？」

さすがに心配になって訊いてみた。

そしたら。

「お前たち、乱暴すぎるぞ……」

こーゆー感想がくるとは、ちょっと思わなかったな。ドラマとかだったらこういうとき、「どうして私が」とか「君たちは無事か」って言うのに。

だいいちこういう状況でまで、文句言うってどうかしてる。

そんなこと考えながら手順どおり移動したら、向こうから他の警備の人たちが駆けてきて、あたしたちを取り囲んだ。

「殿下、ご無事ですか？」

「見てのとおりだ」

使用人に気弱なことか、見せられないってことなのかな？ さつきまでの様子はどこへやら、殿下がいつもの尊大さで答えて。

「屋敷へ戻る。車を用意してくれ。」

それから、シエラ学院から来た者たちも、一緒に戻ってもらう。そのように手配しろ」

殿下の命令でみんな一斉に動き出して、あたしたち一階の、応接室みたいな立派な部屋へ通された。

「用意が出来るまで、こちらでお待ちいただけますか？」

「分かった」

窓のそばにも、扉のそばにも、コワモテのおじさんたちが並ぶ。さつきのことがあったから、すごい警戒ぶりかも。

殿下のほうはなんだか、深刻な顔。もしかしたらやっと、どれだけ危ないか分かったのかな。

そこヘルーフェイアたちが入ってきて、殿下が一瞥して。

「おまえたち、先ほどは痛かったぞ」

「も、申し訳ありません……」

シルファ先輩が謝ってるの見て、また腹が立っちゃったり。

そりゃあ不発だったけど、もしあれがふつうに炸裂してたら、突っ立ってた殿下はあの世行き。シルファ先輩たちがカバーに入った状態だって、大ケガしたかもしれないし。もちろんそうになったら、先輩たちはケガじゃすまない。

そういうこと、分かってるのかな？

「まあ幸い、不発だったからな。だが次からはもっと」

「不発ではありません」

殿下の声を、エレニア先輩がさえぎった。

「そうですよね、先輩？」

「まあ、そうだな。ルーフェイアの魔法がなければ、私たちもケガをしていただろう」

視線がいつせいに、いちばん小さいルーフェイアへ集まる。

「何したの？」

好奇心で訊いてみて。

「あのレア防御魔法、殿下に使ったのは、分かったけど。でも他に、ルーフェイアったら何かした？」

「けどルーフェイアったら答えない。」「とんでもないことした」って表情で、半分落ち込んでうつむき加減なの。



## Episode : 20

でも代わりに、シルファ先輩が答えてくれた。

「ナティエス、殿下じゃない。ルーフェアはあの魔法を、砲弾に使ったんだ」

「え？」

意味がわかんなくて、あたしもシーモアも考え込む。だって防御魔法を砲弾って……意味なさすぎだし。

悩んでるあたしたちに、シルファ先輩が言った。

「二人とも、ああいう種類の砲弾を硬い箱の中に入れて炸裂させたら、周りがどうなるか分かるか？」

「え？ 周りって言われても……そういう箱の中でなら、別に被害とか、出ないですよ」

そうやって爆発させて、爆弾の処理することあるし。

「そうだな。」

じゃあ、箱の代わりに砲弾の外殻を、防御魔法で強化したらどうなる？」

「そんなことしたら、箱に入れるのといっしょで中だけで あっ

！」

思わずシーモアとあたし、顔を見合わせた。

ルーフェア、すごすぎ。

あのレア防御魔法って意外とむつかしくて、ちゃんとダメージ止められるくらいに使いこなせる人って、教官でもほとんどいないの。それに使いこなせても、息止めてられる間くらいしか持たないし、

範囲も小さい子がやつとくらい。しかも一回使っちゃうと、空間の属性バランスが大きく崩れるとかで、同じ場所じゃしばらくの間使えなくなっちゃう。

でも発動してる間は、その効果範囲内なら、ほとんど無敵っていう魔法だった。だから昔は、イザってときに盾や兜にかけたって言う。

そんな魔法を、砲弾の外殻にかけたら。

「中の火薬が爆発しても、砲弾自体が炸裂しなきゃ、不発といっしょってことか……」

「そういうことだ」

なぜか小さくなっちゃってるルーフエアのこと、あたしたち肩叩いた。

「すごいじゃない、ルーフエア。おかげでみんな助かったんだね」

「それは……周辺の魔力の条件、良かったし……砲弾も少なくて、早くから見えたから……」

褒めたのにルーフエア、ますます小さくなっちゃってる。

「あと、先輩たち……殿下かばいながら防御フィールド、作ってたし……」

ほんとに彼女、自慢とか自信とかどっかに落としてきた感じ。これだけのことしたんだから、もっと堂々としてればいいのに。

これって言い換えたら、それだけのことをあの一瞬で見抜いて、それにあわせて行動したってこと。

あたしたち、ぜんぜん気づかなかったのに。

そして思った。ルーフエアが少年兵あがりってことは聞いてたけど、それって……こういう場所だったんだ、って。

こんなことが、日常茶飯事の場所。それってあたしでもちよつと自信ないのに、ルーフェイアみたいなおとなしい子には、どれだけ辛かっただろう？

だったらちよつとくらい泣き虫でも、しょうがないのかも。

## Episode : 21

「ルーフエイア」

けどわいわいやってるあたしたちの間に、シルファ先輩の厳しい声が割って入った。

「ひとつだけ、約束して欲しい。二度とこんなことは……するんじゃない」

ルーフエイアが、きょとんとした表情になる。

「何か、問題が……？」

「何か、じゃないだろう！」

シルファ先輩が声を荒げて、あたしたち思わず身をすくめた。

「失敗したら、どうするつもりだったんだ！」

「え、でも、その可能性あったら、やらないです……」

ようするに、ぜったい間違いないって判断したからやった、ってことみたい。その辺はさすが、少年兵あがりなだけあるかも。

けどシルファ先輩は、納得しなかった。

「それでもダメだ！ 自分の身を、危険に晒すんじゃない！」

「危険？」

なんだか話が噛み合ってない。それに先輩、かなり怒ってる。

「おまえたち、私の前で何をやっている」

さえぎったのは、殿下。

やなヤツだけどこのときだけは、殿下ナイス、って思ったり。やり取りが止まったもの。

「任務で来ていて、仲間割れをしているようでは困る。」

それにそちらの……ルーフェイアと言ったか？　彼女がやったことは、仕事としては上出来だと思うがな」

シルファ先輩が答えに詰まる。

あたしたちのやることって、この殿下を守ること。その中には、殿下が危険なときには、自分が身代わりになることも入ってる。

進んでやりたくないけど。

だから、状況見て被害を最小限にしたルーフェイアは、間違っていないわけで……。

というか、よく考えたら殿下、ルーフェイアのことかばってる？　彼女のことだけ、名前覚えてるあたりも、アヤシイし。

そんなこと思ってたらドアが開いて、帰る用意が出来たって言われたの。なんでもダミーの車を出して、そのあとふつつっぱい車で、殿下帰るみたい。

「ルーフェイア、だったな。いっしょに来てくれ」

あたしたち、顔を見合わせた。これってやっぱり……。

「あの、殿下！　あたしは……」

ルーフェイアが反論しかけたけど、殿下ったら聞く耳持たず。

「おまえは私の、ガードに雇われたのだろう？　職務放棄か？」

「いえ……」

なんか可哀想だけど、こういうふうに言われちゃったら、従うしかなかった。

「ルーフェイア、いっしょに行ってくれ」

「はい」

仕方なく、って感じでルーフェイアがうなずく。

「何かされたら、ちゃんと言ったぞ。契約外だ」

シルファ先輩、ハッキリ言いすぎ。

もっともルーフェイアのほうは、意味がわかんなかったみたいで、首かしげてるだけなんだけど。

「おまえたち、少しは口を慎め」

「あ……」

とりあえずこの日は、そのまま屋敷に戻って、エンドになった。

## Episode : 22 変化

R u f e i r

学校での騒ぎ以降、さすがに屋敷の外へは出ずに、すませることになった。

最初からこうしてくれればよかったのに。  
でもおかげで、格段に警護が楽になった。  
屋敷の内外はもともと、常駐の警備の人や、雇われた学院の先輩たちが固めてくれてる。だからあたしたちは、同室と隣室とに別れて、殿下の相手をする程度で済んだ。

「ルーフェイア、殿下呼んでたよ」

「え、また……？」

ただこの殿下の相手、なぜかあたしばかり、やるはめになってしまっている。

「しょうがないじゃん、ご指名だもん」

「その言い方、やめて……」

「すぐく、嫌な響きなんだけど。」

もっともミルになんか、通用するわけがない。

「え、どうして？ このまま行ったら玉の輿だもん、サイコーじゃない」

「ルーフェイア、いいな」

「とんでもないことを、面白そうに言つてのける。なんだか目眩がしてきて、無視してシルファ先輩に、呼ばれたことを言いに行った。殿下に呼ばれたときは、シルファ先輩と二人で付くことになっている。」

本当は最初、殿下はあたし一人だけを最初呼んだのだけど、それだとやっぱり心配だ。何かあったときに、守りきれないかもしれない。

同じように「一人だけは危険」とシルファ先輩も言ってくれて、あたしからもう一度お願いして、どうにか殿下は折れてくれた。

ただ屋敷からは出ないから、最初にくらべれば気楽だった。

シルファ先輩と二人、ドアごしに声をかける。

「あの……何か、ご用ですか？」

許可が出て中へ入ると、なんだか殿下、本を幾つも広げてる所だった。

「ああ、来たか。」

いまローム文明についてまとめていたんだが、君なら詳しいことを知ってると思ったのでな」

この数日であたしが歴史 特に戦史関係 にやたら強いことは、殿下に知れてしまっていた。

なにしろうちの家、4000年は続いている。その上殆どの動乱に何かの形で関わってるわけだから、イヤでも歴史に強くなるしかない。

「その、時代にも、よりますけど……。ですけど、ひととおりなら「こんな資料が出てきたんだ。どう思う？」

いろいろ、珍しい資料を見せてもらえるのは、嬉しいけど。

歴史があんまり好きじゃないらしいシルファ先輩は、とくに部屋の間だ。どこの棚から出したのか分からないけど、いつもどおり古いお菓子の本を読んでいる。

あたしは、殿下が見つけた資料を覗き込んだ。

「ローム末期みたいですね。橋がかかった直後……え！ これもしかして、ロームから逃れてきた人たちが、書いたものじゃないんですか?!」

「やっぱりそうか。読んでみるか？」

「いいんですか？」

驚いて尋ねると、殿下が資料を差し出した。

## Episode : 23

ローム末期は、当時の中心地だったローム大陸が、大規模な魔獣雨 何百年かに一度、魔獣が空から大挙して振ってくる現象でほぼ壊滅したのもあって、かなり資料が少ない。ただ周辺国では、こうして時々ロームから逃れてきた人たちの書き残した資料が見つかることがある。

当然、ものすごく貴重な資料だ。

しかもこれを書いた人は、けっこう事情通だったみたいで、今まであまり知られていなかったことが詳しく書いてある。

「……てくれないか？」

「えっ？」

殿下には申し訳ないけど、資料に夢中でまったく聞いていなかった。

「そんなに面白かったのか」

「すみません……」

この殿下、最初の印象と違って、意外と気さくだ。こんな無礼なことをしても、怒ったりしない。

「別に構わん。

それより先日のこともあったから、できれば建国祭の間も、警護を頼みたい。出来るか？」

「警護の追加、ですか？」

確かにあんなことがあれば、そう思うのは無理もないだろう。でも、あたしに言われても……。

「あの、ちょっと、お待ち下さい」

隅っこのほうで手持ち無沙汰にしてる、シルファ先輩のところへ行く。

「えっと、先輩、今の話……」

「ああ、聞いた。だがここでは答えられないな」

言いながら、先輩が立ち上がった。

「殿下、今のお話の件ですが、それをするには……」

「細かいことはいい。出来るのか、出来ないのか？」

殿下の言い方に、シルファ先輩がちょっとだけ「やれやれ」って顔をする。

「ですから殿下、ここで決められることはありません。私に決定権はありませんし、そもそも依頼がなければムリです。

お父上かどなたか、ともかく学院への依頼をまず出していただかないと」

「つまり、依頼を出せばいいのだな。分かった、父から学院に要請してもらおう」

殿下はさらっと言ったけど、そんな簡単にいくんだろうか？

派遣を延長したら、またお金が動く。その分はあたりまえだけど、殿下じゃなくて国が払うわけで……。

ただ殿下が危険に晒されたのは事実だから、その理由で押せば、通るのかもしれない。

「今から父のところへ行ってくる。

そうだ、その資料だが、ここにいる間は持っていてもいいぞ」

そう言っただけは、さっそく部屋を出ていった。

あとがき

新作を読んでくださって、ありがとうございます。いつもどおり、“夜8時過ぎ”の更新です。

この話から少し路線が変わり、本来の？シリーズらしくなります。感想・批評大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ。

## Episode : 24

「……やれやれ。わがままな殿下だな」

今度はシルファ先輩、声に出す。

「いくら気に入ったからといって、延長はやりすぎだろうに」

「そうなんですか？」

最初はあるなに険悪だったことを思うと、気に入ったっていうのはけっこう意外だ。

「でも……シエラの傭兵隊を気に入ったなら、その、いいんじゃないですか？」

そう言ったらシルファ先輩、さっき殿下にしてた表情を、あたしに向けた。何かまずかったらしい。

「えっと、あの……すみません」

慌てて謝ると、シルファ先輩が微笑んだ。

「いや、別にいいんだ。

それにしても延長となると、だいぶ様子が変わってくるな」

「そうですね……」

建国祭の前までっていう話だから、その後のことはあたしたちは、一切考えてない。

けどもし延長されるなら、スケジュールはもちろん警護のやり方も、かなり変わってくるだろう。

「建国祭だから……通常とは、違いますよね？」

「ああ」

答えながら、シルファ先輩がポケットから、何かの紙を取り出した。

「式典と、それに付随する晩餐会や何かの連続だな」

思ったとおり、大変なことになりそうだ。

「中止は……ない、ですよね」

「無理だろうな。この国の面子にかけても、予定通りやるだろう」  
「やっぱり、と思う。」

何しろこのアヴァン、歴史の古い国で、その分プライドも高い。

それがテロ情報で怖気づいたら、沽券に関わるってとこなんだろう。

「シエラの派遣隊に、いちおう伝えてくる。延長の可能性がある以上、情報だけは入れておかないと。」

ルーフェイアは先に、部屋に戻ってるといい

「あ、はい」

言われて戻りかけて、でもあたしは立ち止まった。

「どうした？」

「いえ、あの、ちょっと……」

もし建国祭の間もとなると、いろいろ準備が要るんじゃないだろうか、そう思ったのだ。

「派遣が伸びたとして……あの、例えば服装とか……どうなりますか？」

「服装？ あ、そうか」

シルファ先輩が、スケジュール表を見ながら考え込んだ。

「この日程で殿下に付くと、最悪……正装が要るな。学院かどこかに、頼まないと」

口ではそういいながら先輩、難しい顔だ。

## Episode : 25

「学院じゃ、間に合わないな。日にちがなさすぎる。

仕方ない、殿下か、その父上をお願いするか」

「あの」

勇気を振り絞って、先輩の独り言をさえぎった。

「あたし、あの、そういうの……心当たりが」

「本当か？」

シルファ先輩の問いに、うなづく。

「モノ自体はすぐ出せますし、直すのも2日あればできます。

えっと、だからあの、迷惑じゃなければ……」

何だか凄く悪いことをしてる気がして、言葉が尻すぼみだ。

「大丈夫だ。むしろ助かる。

無駄になるかもしれないが、念のために当たっておいてもらえるか？」

「はい！」

やっと先輩の役に立てた気がして、あたしは弾む足取りで部屋を出た。

「えっと……」

こういう屋敷だと、外へ簡単に連絡が出来ない。ここに備え付けの通話石や、学院から預かった通話石なら問題ないけど、連絡先がなにしろシュマーだ。まさか正規のルートで、連絡するわけにいかない。

このへんのこと、何か考えておかないと。

こんなことがあるたびに、連絡ひとつで手間取ってるようじゃ、イザというときに間に合わないだろう。

ともかくこの人に上手く言って外へ出ようと、屋敷の中を歩き出す。使用人部屋は、一階の北側にあったはずだ。

「おや、シエラから来たお嬢さまが、こんなところまで何のご用です?」

やっと見つけた女中さんが、声をかけてきた。あたしたちのことは、屋敷の全員にきちんと伝えられてるみたいだ。

「殿下のお相手に呼ばれたのでしたら、こちらは見当違いの場所ですよ。ご案内しましょうか?」

前言撤回、ちゃんと伝わってない。けど「護衛だ」と訂正すると、もつとややこしくなりそうな気がしたから、そのままにする。

「あの、そうじゃなくて……ちょっと外へ、出たいんです」

「外へ? それは私には、判断が付きませんねえ」

本当にこういうところは、たかが外へ出るだけでも一苦労だ。警備が厳重なのはいいけれど、その分コトがなかなか運ばない。

「先輩から、用事を言い付かったんです。ダメでしょうか?」

「あら、そういうことです。でしたらちよつとお待ちくださいね」この人たちも、用事を言いつけられることには、慣れてるからだろう。すんなり納得してくれて、どこだかへ連絡して、専任の人のところへ連れて行ってくれた。

「ありがとうございます、助かりました」

「いいいえ。殿下からお嬢さまには、よくするようにと言いつけられてますしね」

「そう、なんですか……」

いったい殿下、何を考えてるんだろう？

不思議に思いながらも、シュマーのほうへ、ムダになるかもしれないことも含めて連絡する。

それから部屋へ戻ると、思ったとおり、みんなが集まっていた。

## Episode : 26

「ルーフエィア、派遣の追加が決まったわ」

思った通りの言葉で、エレニア先輩が切り出した。

「まだ学院へ要請が出た段階だから、本決まりじゃないけど。でも新規じゃなくて延長だから、ほぼ通るでしょうね」

「そう……なんですか。」

えっと、そしたら、どのくらいの期間ですか？」

おおよその見当はついていたけれど、一応尋ねてみる。

「建国祭終了までだから、1週間ほどだな」

代わって答えたシルファ先輩の言葉も、思ったとおりだった。

それにしても、こんなに簡単に追加が決まって、いいものなんだろう？

曲がりなりにもシエラからの派遣だ。けっしてタダじゃないはず。

「移動の連続になりそうだから、覚悟しておいてね。けっこうスケジュールが詰まってるのよ」

エレニア先輩が、用紙をめくりながら言う。

「明日の夕方のレセプションを皮切りに、式典が目白押しなの。もつとも殿下は全部に出席なさるわけじゃないから、それだけは助かるんだけど」

「そんなに……凄いですか？」

そう訊くと、先輩が予定表をテーブルの上に置いてくれた。

確かにかなり詰まっている。ほぼ毎日、何かに出席する感じだ。

「先輩、これもしかして……片っ端からパーティーって言いません

？」

妙に嬉しそうな調子で、ナティエスが訊いた。

「そつ、言っただろうな」

けどよく見てみると、嬉しそうなのはナティエスとエレニア先輩だけだ。

ミルは平然　まあこれはいつもだけど　としてるし、シルファ先輩とシーモアなんて、なんだか嫌がってる感じさえする。

「ドレスとか、どうするんですか」

シルファ先輩が、あたしのほうを見た。いま言っていいかどうか、悩んでるみたいだ。

あたしがうなずくと、先輩がちょっとほっとした表情で、ナティエスに答えた。

「いちおう、借りる当てはある。連絡済みだ」

「あん、買えるわけじゃないんだ」

ナティエス……。

公式の晩餐会や何かに、すぐ買えるような出来合いの物を着て行ったら、かえって目立つのに。

「けど先輩、大丈夫なんですか？　学院に頼んでも間に合わないって、さっき言ってたじゃありませんか」

「えっと、あの」

当事者じゃないシルファ先輩じゃ、答えられない気がして、口をはさむ。

「当てがあるの、あたしです」

「あなたが？」

エレニア先輩が、信じられないという表情をした。

「まあルーフェイアが言うなら、嘘ってことはないでしょうけど、でも大丈夫なの？」

よっぽど心配らしくて、また確認される。

## Episode : 27

「その、連絡したので……用意は、もうしてるはずです。あと日時を言えば、すぐここへ届きます」

このアヴァンの近郊には、小さいながらシュマー家の施設がある。しかも本拠地よりずっと交通の便がいいので、あたしをはじめかなりの人数がよくここを利用していた。

そんなわけでシュマーの面々が使ったための服が、そこにはたくさん置いてある。そしてその中には、あたしたち総領家の物も、けっこうあった。

「そんなにすぐ、用意できるの？」

「はい」

このくらいのスピードがなければ、戦闘集団の要望には応えきれない。

まあ「正装をありったけ用意して持ってい」ってというのは、珍しい要望だろうけど……。

「ねえ、ルーフェイア」

エレニア先輩が、鋭く訊いてきた。

「前から思ってたんだけど、あなたいったい、なんなの？ ロアと二人で、何か隠してるでしょ」

気持ちは分かった。あたしも多分、目の前でこんなことをされたら疑問に思うだろうから。

でも、答えるわけにいかない。

どうしようかと考え込むあたしに代わって、口を開いたのはシルファ先輩だった。

「エレニア、疑問はわかるが……この際、いいのではないか？」

「それはそうですけど……」

シルファ先輩の言葉にそう応えたものの、エレニア先輩はまだ不満そうだ。とても頭がいいから、曖昧なことが気になるのかもしれない。

そこへ今度は意外にも、シーモアが口を挟んだ。

「先輩、実言うとあたしらも、ルーフエアのことは知らないんです。けど、それでいいんじゃないですか？ 彼女は優しくていい子だってだけで。」

だいいちあたしら、殆どがワケありですし」

言外に、これ以上突っ込むのならたとえ先輩でも容赦しないというものを、漂わせている。

一瞬どうなることかと思ったけれど、幸いにもそれはなかった。

「そうね」

思うところがあったらしく、先輩が引き下がる。

こうやって、どれだけみんなにかばってもらっただろう？

あたしがみんなに話したことは、ほとんどゼロと言っていい。

それなのにみんな、何も聞かないでいてくれる。あたしが曰く付きなのを知りながら、知らないふりをしてきている。

ありがたかった。

もしみんながこうしてくれなければ、とうの昔にバレて、学院を退学しなきゃいけなかったはずだ。

「あるだけ、用意したの。みんな好きなの使ってね？」  
思わずそう言う。

「ああ、使わせてもらうさ。ただあたしとしては、あんまり着たくないんだけどね」

「だよね。シーモア、こゆのあんまり似合いそうにな　　ったあ  
い!!」

言葉の途中で見事に殴り付けられて、ミルが悲鳴を上げた。

「ったく、見たこともないくせに好き勝手言いやがって。後で驚くんじゃないよ」

思わずみんな爆笑する。

でもシーモア、ミルの一言に怒って嫌いなドレスを着ることにしたみたいだ。

乗せられたって言う気もするけど。

ただとりあえず、説得しなくてすむのは助かる。シーモアのスカ  
ート嫌いは有名だ。

「それにしてもあるだけって、いったいどのくらいなの?」

「え?　たいした量じゃないけど……でも少しでも、多いほうがいい  
と思うて……」

やけに期待してるナティエスに、そう答えるしかなかった。いち  
おうひとおりは揃ってるけど、あくまでも「それなり」だ。だい  
いちシューマーはもともと戦闘集団で、貴族じゃない。

「ふうん、そう。でもまあいいかな?　滅多に着られないもんね」

「ごめんね、期待裏切っちゃって」

久しぶりにのんびり、みんなと会話しながらの時間だった。

## Episode : 28

Sylpha

「ルーフェイア、これのどこが『大した量じゃない』のよ！」

届けられたものを見てのエレニアの一言は、あまりにももったもっただ。

部屋が埋まっている。

おそらくクライアント側に頼んだとしても、これほどは用意できないだろう。

ナティエスがやけに嬉しそうだった。所狭しと下げられたドレスの間を縫うようにして、うるうる物色していた。

「すつごおい、お金持ちって違うわね」

そう、言うのだろうか？

詳しく知っているわけではないが、ルーフェイアの場合は、普通に言う上流階級とは何か違う気がする。

「ごめんね、みんな袖、通しちゃって……。えっと、そっちのサイズ、ナティエスとミル……着られるかも。」

シーモアと先輩たちは……従姉と母のが、合うと思うんですけど「いちおう母親などと共用しているようだが、それにしても半端な量ではない。」

「ほんとうにいいの？ どれも高い生地じゃない。汚したら申し訳ないわ」

エレニアが恐縮する。

「構いません。どうせ部屋で、場所ふさいでるだけで。もしよかったら、持って帰ってください」

「持って帰るって、あなたねえ……」

どうもルーフェイアは、あまりこの類は好きではないようだ。さつさと数着選び出して、終わりにしてしまっている。

「ねえねえシーモア、これ着てごらんよ」

「あ、いい色。似合うよ、きつと」

見れば下級生たちは、向こうで大騒ぎしていた。

エレニアも大人びたものを数着、選び始める。

「靴と装飾品も、使っちゃってるけど、これ……」

「ひゃー、これホンモノじゃない」

あのミルが驚いた。

だが、それも当然だろう。ルーフェイアがさりげなく差し出した装身具は、どれもかなりの大きさの宝石類を、あしらったものばかりだ。しかも手が込んでいる。

「ほんとうに……使っていいのね？」

エレニアが念を押す。

「はい。あと、持って帰ってください」

どうもルーフェイアの感覚は、ずれているようだ。

「じゃあ悪いけどレセプションなんかがけっこうあるから……3つ4つ借りるわ。これ、いいかしら？」

「あ、それ、似合いそうですね」

けっこう楽しそうではあるが。

しばらく私が眺めているあいだに、どうやらみんな決まったようだった。

「あとはアクセかあ。なくさないようにしなくちゃ」

「これ……あげるけど？」

「えゝ、それはまずいよ。だってこれ、半端な額じゃないもん」  
「え、そうなの？」

普通では考えられないような会話が続けている。

価値を知らないのか、それとも慣れすぎてしまっているのだろうか？

と、ルーフエィアがこちらへ来た。

「シルファ先輩……試着、しないんですか？」

不思議、といった調子尋ねてくる。

「いや、その、私は……」

「……お気に、召さなかったですか？」

「そうじゃないんだが……」

思わず口籠もった。

実を言えば、スカートの類は苦手だ。制服でさえ着たくない。  
いったいどう、言い逃れたものか……。

## Episode: 29

### Natives

もう、ルーフェイアったら嘘ばかり。確かに新品ってわけじゃないけど、質のいいドレス、部屋いっぱいじゃない。

色もサイズもデザインも、すごいたくさんあるの。よりどりみどりで迷っちゃう。

「〜」

思わずハミングしながら、物色したりして。

どうしようかなあ？ この水色のやつ、似合うかなあ？ ちょっと幾つか選んで、試着してみたり。

「あとはアクセかあ。なくさないようにしなくちゃ」

「これ……あげるけど？」

うーん。ルーフェイア、マジお金持ち？ かるーく「あげる」とか言ってるけど、どれもホンモノだし。

そんなこんなしながら、あたしたちみんなで着るもの選んだんだけど……。

「シルファ先輩……試着、しないんですか？」

そうなの。エレニア先輩は素敵なのをいくつか選んでるんだけど、シルファ先輩、見向きもしないの。

「いや、その、私は……」

しかも先輩、ルーフェイアに訊かれて、なんか困り顔だし。

「……お気に、召さなかったですか？」

「そうじゃないんだが……」

うーん、これってもしかして、シーモアと同じパターン……？  
よし

ちよいちよいっと手招きして、シーモアとミルを呼んでみて。ついでにエレニア先輩も。

「なに、どしたの？」

「うん、シルファ先輩、どんなドレスが似合うかなって」

「あの先輩、大人びてるからな……」

4人でドレスの間を移動しながら、選んでく。

「ねえねえ、これどうかな？」

「ねえミル、先輩って瞳が紫だから、そういう色の方が似合うんじゃないかな？」

「そうしたら……これなんかどうかしら？」

「あ、エレニア先輩、センスいい」

結局あたしたちが選んだの、Aラインのドレス。上半身は藤色で綺麗な刺繍が入ってて、スカートの部分はもっと淡い薄紫。

オフショルダーになってて肩が出るから、きつと着たら素敵だろうな。

アクセサリーは……サファイアがいいのかな？ 金じゃなくて銀色っぽいやつで。

「じゃあこれ、先輩に」

「あ、待って」

ちよつとだけないしょ話。

「あのね……」

「……？」

「……」

「  
！」  
」

で、作戦会議終了  
さて、いきますか？

## Episode : 30

まずミルがにこにこつと笑って、シルファ先輩の前へ出た。

「せーんぱい 着ないとルーフェイア、泣いちゃったり」

「え、あ、そういうつもりじゃ……」

案の定、シルファ先輩が慌てる。

「そしたらあ、ちゃんと着なくちゃ」

「いや、でも……え？」

ミルに気を取られてるうちに、シーモアとエレニア先輩、シルファ先輩の後ろに回ってたりして。

で、当然右腕と左腕つかんで。

「い、いつたい何を……？」

「こういうことです」

いいさまあたし、指を動かした。ささつと先輩のベルト、外してみたりする。

あたしけっこう、スリの腕よかったんだから。

で、ついでにブラウスのボタンも。当然先輩の素肌があらわになったり。

「なつ、何をするんだっ！」

先輩、混乱してるし。

「あゝ、シルファ先輩ムネおっきい」 やっぱり89だあ

ミルが大喜びする。

「あ……先輩、いいな……」

ルーフェイアもいつのまにか、先輩の前へ来て、羨ましそうに眺めてるし。

って、あらま。

「!!!!」

シルファ先輩、凍っちゃうし。  
まあそうだよな。ブラの上からとはいえ、いきなりムネ触られたりしたら。

ただルーフェイアは下心とかじゃなくて、単純に羨ましかったみたいけど。

「ルーフェイアずるうい！ あたしも触るゝんぎゃ」

こっちは下心見え見え。でも騒ぐミルに、シーモアのケリは塞がってるもん が決まって一件落着  
で、転がってるミルは放っておいて、こっちはまだ一仕事。

「エレニア先輩、もうちょっとしっかり抑えててくださいね？ シーモアもよ？」

「きつ、着るっ！ 自分で着るから、放してくれ!!」

「えゝ、せつかくここまで来たのに……」

つままないじゃない。

けど横から、ルーフェイアが割って入って。

「ねえ……放してあげて。先輩、可哀想……」

泣きそうな瞳でこっち見るの。これじゃしょうがないかなあ？  
じつ言つとここにいるメンバーで彼女の涙に勝てるの、いなかったりするのよね。

「じゃあ先輩、これどうぞ」

「いや、だから……」

うーん、あたしじゃやっぱり、まだイマイチかな？  
けどいいタイミングで。

「あの、先輩、ダメ……ですか？」

ルーフェイアからもお願い攻撃。シルファ先輩、これに特に弱いよね。

もちろん今回も、ばっちり有効。

で、先輩が一式着てみて。

「うわぁ……」

「すっごおい！」

「先輩……綺麗」

想像以上だったりしたの。

これなのに先輩ったら、ぜったいスカートはかないんだもん。もつたいないなあ。

「あ！ いいこと考えた」

ミルが急に、素っ頓狂な声を出して。

「もう、耳が痛いなあ……。で、いいことって？」

一応は聞かないと。

「あたしね、影写機持つてる。写しとこうよ」

「あ、それいい考え。みんなで撮ろうか？」

ミルにしては、すっごいまとも。けどなんで、そんなの持つてきたのかな？

「私は……遠慮する」

「だめですよ。それとも先輩……？」

あたしが笑いながら1、2歩出たら、シルファ先輩あとずさつちやうし。

「先輩……」

しかもルーフェイア、泣きそうな顔で上目遣いに先輩見るし。

「……わかった」

で、記念撮影。

写影出来上がるの、た・の・し・み

## Episode : 31 策略

R u f e i r

こんな会場にでるなんて、久しぶりだった。

立食式の会場は、たくさんを着飾った人々で賑わっている。

この黒いつぶつぶのつたパン、おいしい

ただ今日は幸いにも、あたしを知ってる人はほとんどいない。

いわばアヴァン国内の内輪だし、一方であたしはごくたまに財界関係に顔を出す程度だから、面識がない人ばかりだ。

殿下には今は、エレニア先輩とミル（！）がついてくれてる。いずれにせよ会場の内外はかなり厳しく警護されてるから、あとは誰かが殿下に張り付いていれば、ほぼ大丈夫だろう。

もともと油断はできないから、残りのメンバーも遠巻きにするようにして気を配ってはいた。

あ

シルファ先輩の後ろ姿をみつける。ナティエスたちが選んだ薄紫のドレスが、とてもよく似合っていた。

タシユア先輩が見たら、なんて言うだろうか？

あたしだけ綺麗な先輩を見て、申し訳ないような気がする。

「シルファ先輩」

「あ、ルーフェイアか」

声をかけると、先輩が振り向いた。

あれ？

よく見ると先輩、最初にナティエスたちが選んでいたのとは違うアクセサリーを付けている。

銀の鎖にさがる　これは水晶だろうか？　綺麗な結晶の形をしていて、滅多にお目にかかれないほどの透明度だった。

「先輩、そのペンダント……？」

「え？　ああ……そういえば、折角ルーフェアが用意してくれたのを、付けなかったな。すまない」

「あれはどうせ、ありあわせですから。」

これ、水晶ですよね？」

近づいてみても、傷ひとつ見当たらない。結晶の内部も完全な透明だ。

「こんなに透明度が高いの、珍しいですけど……どうしたんですか？」

掃いて捨てるほど　ほんと、困るだけ　あるうちのアクセサリの中にも、これだけ透き通ったクリスタルはあまりないだろう。

「これか？　タシユアが、くれたんだ」

「ええっ！」

思わず声をあげる。

「そんなに、意外か？」

「え、あ、別にその、あっちゃいけないとかは……けど、でも……どう取り繕ったらいいのかわからない。」

けどシルファ先輩、そんなあたしを見て笑っただけだった。

「信じられないだろうな」

「はい……」

あの毒舌によらず、意外にもタシユア先輩が優しいのは、あたしも知ってる。けど、まさかプレゼントをするとは思わなかった。

「誕生日に……もらったんだ」

そう言ってシルファ先輩が、水晶を握り締める。

不思議な表情。

うつとりしているのに、どこかに遠い昔の寂しさが混ざっている。

でも、この学院でこの表情をする人は多い。

孤児故に、何も持たずに育った。それがこの学院へ来て年数を重ねて、やっと信じられるものを手にして……そんな時にみんな、この表情を見せる。

シルファ先輩も他の生徒の多くと同じように、早くに両親をなくしたと聞いていた。だから多分、学院へ来る前はいろいろ苦労したんだろう。

そのまま幸せになって欲しいと、願わずにはいられない表情だった。

## Episode : 32

「素敵な、プレゼントですね」

「ああ」

そのまま2人で黙ってしまふ。

シルファ先輩はとても口数が多いとは言えないし、あたしもミルやナティエスのようには喋れないのだから、当然といえば当然だ。けど、こうしてるのは嫌いじゃなかった。

手にしているグラスの中身を飲みながら、なんとなく暖かい雰囲気

に浸る。

「ルーフェイア、ここだったのか」

それを破ったのは、シーモアの声だった。彼女が着ているのは、銀色のドレス。袖なしで、前合わせのちよつと見かけないデザイン。誰がこんなの作らせたんだろう？で、身体にぴったりとはりついている。

髪も結び上げてるから、まるで別人みたいだ。

「なに？」

「いや、また殿下があんたお呼びだから、探しに来たのさ」

「また……？」

どう考えても多すぎないだろうか？

「ともかく、行ってくれないか？ あたしらじゃ、てんでダメらしいからね、あの殿下は」

「あ、うん。」

えっと先輩、ちょっと失礼します」

「気をつけるんだぞ」

シルファ先輩の声を背中に、シーモアに先導される格好で会場を横切る。

エレニア先輩といっしょにいた殿下が、あたしたちを見つけて近づいてきた。

「ルーフェイア、時間はあるのか？」

「あ、はい。殿下のお傍にるのが、任務ですから」  
時間も何も、このためにいるとしか言いようがない。

「そうだったな。ちょっと一緒に来てくれないか？」

他の者は少し、下がってもらいたいんだが  
「それは承諾しかねます」

エレニア先輩    ハイネックに、裾だけ広がったデザインのドレス、すごく似合ってる    が即座に反対した。

それもそうだろう。何かあった時に護衛があたしひとりでは、殿下をかばいきれないかもしれない。

でも殿下、そのくらいじゃびくともしなかった。

「それならお前たちへの依頼を、解消するだけだ。行くぞ」

こう言われたら、やりようがない。エレニア先輩が歯噛みをしているのが分かる。

ただその時、目があったミルがウインクした。そして彼女、小さく手を振る。

そうか。

いったいどうしたわけか、ミルはこの会場の構造に詳しかった。おそらくこっさり、付いてきてくれるつもりなんだろう。

彼女がどうかしてくれることを祈りながら、殿下と一緒に会場を歩く。

きらびやかな屋内。

南側の庭に面したこの大広間は、透き通ったガラスがふんだんに使われてた。日中はそれに日の光が反射して、とてもきれいだっという。

ただ今はもう夕暮れを過ぎているから、代わりに無数の灯りの光が反射して、やっぱり複雑に煌いていた。

## Episode : 33

きらびやかな屋内。

南側の庭に面したこの大広間は、透き通ったガラスがふんだんに使われてた。日中はそれに日の光が反射して、とてもきれいだっという。

でも今はもう夕暮れを過ぎているから、代わりに無数の灯りの光が反射して、複雑に煌いていた。

「それを着てくれたんだな」

「え？ あ、はい」

実はあたしが着てるドレス、自分の持ち物じゃない。いったいどういう風の吹き回しか、殿下が届けてくれた。

本当を言えば、それなりに戦闘に耐えるようになってる、自分のもののほうがいい。でも殿下の好意を無にするわけにもいかなくて、結局着ることにした。

ただ殿下の持ち物なだけあって、超一級品みたいだ。

形は裾が広がったオーソドックスなものだけど、トーンの違う薄翠の透ける布を幾つも重ねて、花びらみたいに仕立ててある。

しかもよく見ると、似たような色で細かい刺繍までされてるし、宝石も幾つもあしらわれてた。

あしらいすぎてて、裾とか宝石、どこかに引っ掛けそう。

もし戦闘になったら、満足に動けないんじゃないだろうか？

けど自分のじゃないから、切り落としたりできないし……。

「意外と似合うな。死んだ姉のものなんだが」

「あ、えっと、ありがとうございます」  
不意に殿下から声をかけられて、慌てて答える。  
けどなくなつたお姉さんのものを赤の他人に着せたりして、構わないんだらうか？ 確かにクローゼットの奥で眠らせておくには、もったいないと思うけど。

ときどき周囲から声をかけられては、それに答える殿下の後ろについて、光と彫刻とに彩られた屋内を歩く。

やがて殿下は屋外へ出た。

この庭は広間から簡単に出られることもあつて、いくつもテーブルが用意してある。

でもあたし自身は、気が気じゃなかった。

どう考えても屋外の方が、警備は甘い。学校でのこともあるし、こんなところに長時間いたら何が起こるか知れなかった。

それなのに殿下、テーブルの上からグラスを一つ取ると、奥の木立のほうへと歩いていく。

「殿下、お待ちください。危険過ぎます！」

「少しだけならいいだろう？」

警告しても取り合おうとしない。

「先日のこともあります。せめて屋内へ戻っていただけませんか？」

「それなら、この質問にだけ答えてもらえないか？」

「質問、ですか？ わかりました」

殿下が戻ってくれるなら、とりあえずなんでもいい。

「君は、どこの家のものだ？ どう考えても庶民とは思えないからな。」

まあ、アヴァン国内じゃなさそうだが」

「え……」  
さすがに答えに詰まる。

## Episode : 34

なにがあってもシュマーなどとは口に出来ないし、かといって家が所有している財閥　ようはシュマーの表の顔　の関係者なんて言ったら、やっぱりややこしいことになるだろう。

万が一どこから、そんな財閥の子弟が孤児ばかりの M e S ・ シエラの本校にいるなんて漏れたら、いろんなところが大騒ぎだ。

「その……お答え、できません……」

それ以外に答えようがなかった。

「なるほど、やっぱりワケありか。まあいい、そのうち分かるだろうしな」

そのうちでも分かると、あたし困るんだけど……。  
けどそう、口にするわけにもいかない。

「あの、ともかく屋内へ戻りませんか？」

「そうだな」

結局、なんのために出てきたんだろう？　ただどちらにしても、戻ってくれると言っの的是ありがたかった。  
急いで歩き出す。

けど。

かすかに聞こえる、刃と刃のぶつかり合う音。そしてそれを上回る、イヤな「何か」。

「殿下！」

このまま行くのは自殺行為に思えて、急いで殿下を木立の中へ引き戻す。

「どうし」

言いかけた殿下の言葉は、轟音にかき消された。

「な、なんだ？」

「おそろく……爆弾です」

「なんだと！」

慌てて駆け出そうとした殿下を、制す。

「お待ち下さい、危険です。気になるのは分かりますが……」ご自宅へ、戻られたほうが」

言いながら、遅かったと思う。警護の人たちが、あたしたちを取り囲んだ。

「なんだ、お前たち。ちょうどいい、家まで……」

「殿下、ダメですっ！」

「……なんのつもりだ」

いつせいに銃口を向けた男たちに、意外にも冷静に、殿下が問いかけた。

「貴様ら、僕が誰だか分かっているんだろうな？」

分かっているなかったら、こんなことはしないんじゃないだろうか？

ついそんなことを思う。

警護役 どう考えても実際には違うだろう も、同じことを答えた。

「分かっているなければ、こんなことはしませんね。さて、我々と一緒に来ていただけますか？」

「あいにく、忙しいんだが」

「殿下、いけませんっ！」

とつさに制止する。こんな相手に毒舌を振るったら、下手をすれば殺されかねない。

## Episode : 35

「ほう、こっちのお嬢ちゃんは、ものわかりがいいようだな」

別にそういうわけじゃない。できればさっさと倒して帰りたいとこだ。ただそんなことをしようものなら、殿下の安全が確保できなくなる。

なにがあっても、殿下を危険にさらすわけにはいかなかった。

考える。

敵の数は……決して少なくない。いま目の前にも数人いるし、物陰に隠れてさらに何人もが、こっちを取り囲んでるのが気配で分かる。

仕掛けられていたらしい爆弾といい、この人数の警護役が敵に回ってることといい、どうやら内通者がいたみたいだ。

「お前たち、なにをするつもりだ？」

いいタイミングで殿下がした質問の、答えに耳をそばだてる。

「上手く殿下にお会いできたので、ご招待しようかと思ひまして、ご同行願えますか？」

微妙な言い回しだった。偶然遭遇したとも、最初から狙っていたとも、どちらとも取れる。

「断つたら、どうなる？」

「その場合はここで、お休みいただくことになりますね。」

もっともあの爆発を首尾よく回避された殿下なら、そんな愚かなことは、なさらないと思いますが」

危険だ、と思う。この言い方から見るかぎり、この敵は殿下の生死を、さほど気にしてない。

首尾よく攫えればOK、ダメなら亡き者に、というところだろう。応援も、期待できそうになかった。包囲網が厚くて、先輩たちがここまで突破できるとは思えない。それどころかあの爆発 どう考えても会場は大惨事に、巻き込まれた可能性もある。

殿下の身の安全のためにはけつきよく、ここは従うしかなさそうだった。

でも、ひとりで行かせるわけには……。

「さ、ご同行願えますか？」

銃口は向けたまま、男たちが殿下を両脇から挟む。

「リーダー、この嬢ちゃんはどうします？」

「喋られたら困る。始末しておけ」

思ったとおりの展開だ。

ここからどう、上手く持っていくか、それを必死に考える。

「その子を、殺すのか？」

「殿下には関係ないことかと」

答える男に、殿下が意外なことを言った。

「彼女はユリアスから招かれている。下手に手を出せば、国際問題だぞ」

「……」

この脅しは、効いたみたいだった。どこの誰かは分からないけど、さすがに外国とはコトを構えたくないらしい。

「やむを得ん、お嬢ちゃんも一緒に来てもらおう」

男の言葉に黙って従う。殿下の機転で付いていけるのだから、文句なんてなかった。

でも、全く何にもせずに、連れて行かれる気はない。男たちに気

づかれないように呪文を唱えて、放つ。

殿下を巻き込めないから誘拐犯相手には使えないけど、魔法の使い道はそれだけじゃない。

## Episode : 36

呪文が発動して、虚空に稲妻が閃いた。これを見れば、先輩たちは何か起こったことは、分かってくれるはずだ。

「な、なんだ？」

瞬間明るくなった辺りに、男たちが慌てる。

「わからん、だが急ぐぞ！」

短銃を突き付けられたまま　あたしにはあんまり意味が無い  
追い立てられるように暗い庭園を横切って、塀のところまで来る。

驚いたことに柵の一部が門になっていて、出入りが可能だった。

なにかあったときのために隠してつくられたのだろうけど、これが  
今回は裏目に出たみたいだ。

暗いうえに、に門の向こうも木々が茂っていて、見通しはあまり  
よくない。けどどうにか、車が停められているのを確認する。

それにしても。

さつきも思っただけど、やっぱり内通者がいたらしい。そうじゃな  
きゃこんな場所の隠し扉、部外者が知ってるわけがない。

「過激派」って話でここへ来たけど、アヴァンの内部事情は、か  
なり複雑みたいだった。

何かの手がかりになるかもしれないと、男たちの話を聞き漏らさ  
ないようにする。

「ほんとにこのまま、殿下とこの子を連れて行くのか？」

「目撃者を放っておくことは出来ん。」

まあ、少ししてから死体を放り出すさ。そうすればアヴァンの手  
落ちだと、ユリアスが責め立ててくれる。好都合だ」

なるほど、と思った。

どうもこの過激派、アヴァンがユリアス シエラの本校があるあたしたちの国 と対立すること自体は、むしろ嬉しいみたいだ。ただそれには、少し長引かせて騒ぎを大きくしてからのほうが、確實ってことなんだろう。

何か特定の思想で動く集団が、騒ぎを起こしてるだけって思ったけど、もっと大掛かりな組織みたいだった。

いろいろ考えながら、とにかく当分は、おとなしくしておくことに決める。

今のあたしの強みは、ふつうの女の子と思われてることだ。彼らはあたしが戦えるなんて、夢にも思っていない。

この勘違いを、利用しない手はなかった。

「予定通り白い森へ向かうぞ。 さつさと乗るんだ」

この部隊？のリーダー各らしい男に、車へ押し込まれる。

「この子に乱暴なことをするな。 骨でも折れたらどうする気だ」  
「殿下、立場が分かってらっしゃらないようですね」

言葉とともに、銃口が向けられる。

けど殿下は、微動だにしなかった。

「生かしておいたほうが価値があるから、攫うのだろう？」

それに僕に手を出せば、この国の世論は一気に動く。 そうなったら困るのは、お前たちのほうだと思うが」

この殿下、思ってたよりもずっと、肝が据わってる。 それに自分の価値がどこにあるかも、それがどう利用できるかも、ちゃんと把握してる。

ちよつと見直した。

まあそれでも、いざ脱出となったら、役には立たないだろうけど……。

「まったく、口の減らない殿下だ。まあそれも、いまのうちだろうが」

男が言いながら、前の席に乗り込む。

「尾けられていないだろうな。よし、出せ」

闇の中を、車が走り始めた。

## Episode : 37

Sylpha

ルーフェイアが行ってしまつと、急に周囲が寂しくなつた。華奢で繊細で泣き虫だが、あの少女には華がある。

そのあたりのテーブルからグラスを取つて、さりげなく辺りを見回していると、声をかけられた。

「いつしよに踊つてもらえませんか？」

「すまない、失礼する」

それだけ言つて場所を変える。

育ちの良さそうな貴族の子弟たち。殿下もそうだが、自分の力で得たわけでもないのに「権力」というものを振りかざして、平然としている。

だが彼らから地位と権力を取つたら、恐らくなにも残らないだろう。

つまらない、な。

実力の伴わない力など、所詮は付け焼き刃だ。頼ろうものなら必ずどこかで足を掬われる。

なんとなく胸元のペンダントをいじつて、タシユアを思い出した。彼と比べればこの会場にいる貴族の子弟など、石ころにしかみえない。

桁外れの實力と、それをさらに上回る精神力。普段それを見せることはないが、タシユアは付け焼き刃などという言葉とは無縁だ。今ごろ、何をしているのか。

と、気配がした。

「エレニア、どうした？」

「それが先輩、ちょっと困ったことが……」  
どうしたものか、そんな表情でこの才媛が起こったことを報告する。

「あの殿下にも困ったものです。とりあえず下級生たちが、あとをつけてはいますけれど」  
さすがに慚然とした調子だ。

「殿下は……今どこに？」

「つい先程、屋外へ。ナティエスが知らせてきました」

「まずいな。行こう」

「はい」

2人で急いで向かう。

「他の子は？」

「全員外です」

脚にまわりつく裾をさばきながら、横切っている会場が、どこかおかしい気がした。さっきまでと何かが違う。

なんだかやけに引つかかったが、私はともかく外へ急いだ。殿下のこのほうが先だ。

「あ、先輩！」

シーモアとナティエスが振り向く。

「殿下は？」

「あつちです」

2人の案内で、庭園の奥へ走り出す。

だがとつぜん前に、何人もの男たちが立ちはだかった。



## Episode : 38

「さあ、会場へ戻りましょう。案内しますよ」

ほぼ間違いないと見て、ドレスの裾に手をかける。

「うわ、先輩いきなり、何してんです！」

後輩が悲鳴に近い声をあげた。

「丸見えですよ！」

「？」

ドレスの下、太腿につけておいた短剣を取ろうと裾をたくしあげただけなのに、何を騒いでいるのか分からない。それとも、隠しておいた短剣が丸見えになったのが、悪かったのだろうか？

なぜか男たちも、動きが止まって隙だらけだった。

その男たちに、問いかける。

「アヴァンの紋章は？」

「え？ 猛き火竜がどうかしましたか？」

後輩たちにも緊張が走った。

さっきの問いは、合言葉だ。警備役は「青い竜」と答えることになっっているが、何も知らない潜入者なら、正直に実際の紋章を答えてしまう。アヴァンの紋章が広く知られているのを、逆手に取った方法だ

そしてこの男たちは今、本当の紋章のほうを答えた。

「さあ、そんなオモチャはこちらへ。危ないですよ」

まだ分かっていない男たちに、切りかかる。

「エレニア、シーモア、殿下を！」

「はい！」

二人が駆け出し、男たちが舌打ちしたその時。

「伏せろっ！」

爆発音に、とっさにそう叫んだ。私以下全員が大地へと伏せる。轟音があたりを揺るがし、爆風が身体の上を駆け抜けて行く。木々の葉がざわつき、ちぎれて宙に舞った。

「全員、無事か？」

おさまったところですぐに起き上がり、確認する。

「はい、大丈夫です」

言葉どおり、幸い誰にも怪我はなかった。庭園の割と奥、木立のほうまで来ていたのがよかつたらしい。

「捕虜を取りそこなつたな……」

辺りを見回して、その言葉が口を突いた。

最初からタイミングが分かっていたのだろう、男たちは逃げ出したあとだ。そして私が切りつけた相手は、殺されていた。

「ナティエス、報告を頼む。他は私と来てくれ。殿下が心配だ」

「はい！」

後輩たちの返事を背に、庭園の奥へと走り出す。ミルの姿が見えないのが気がかりだったが、とりあえず後回しだろう。

その行く手、木立の間から、突然光が射した。

「魔法？」

閃く稲妻に、エレニアがいぶかしげな声を出す。

「ルーフェイアだろう、行くぞ」

侵入者がこんな目立つことを、するわけではない。だとすれば戦闘になったか、あの子が合図で放ったかだ。

だが私たちが現場につくよりも早く、嫌な音が聞こえてきた。  
かすかだったが間違いない。車の駆動音だ。  
間に合わなかったか。  
背筋を冷たいものが伝う。

## Episode : 39

「あ、せんばあい!!」

「ミル?」

いったい何をどうやったのか、ミルが向こうから駆けてきた。ドレス姿だというのに、普段と変わらない調子だ。

「なんで、そこにいるんだ……?」

たしか私たちと、いっしょに庭へ出たはずだが。

「んー? どうしてだろー?」

緊張感のカケラもない言動に、気が抜けそうになるのを踏みとどまる。

「あ、それでえーと、思い出した! んと、大変なの」

「……分かってるから黙ってくれ」

さすがに、返事がそっけないものになってしまう。こういう状況下でのんきにされるのは、あまり面白くない。

「え、でもー、殿下がさらわれちゃったよ?」

「なんだって!」

ミルの答えに、そう返すしかなかった。

最悪の事態だ。潜入していた男たちとのことで、時間を取られたのがまずかった。

「殿下は、どんなふうに攫われたの?」

「ふつうに」

今度は思わず力が抜けた。会話になっていない。だいいち攫われた時点で、普通も何も無いと思うのだが……。

「あとで詳細を聞かせてくれ。それと、ルーフェアはどうした？」

「いっしょにさらわれちゃった」

思考回路が空回りしたらしく、能天気な言葉が脳に伝わるのに、一瞬間が空いた。

「どういう……ことだ？」

イザとなればあれほどのキレを見せるルーフェアが、攫われるとは思えない。

ミルはミルで、伝わらないのが不思議そうな顔で、話を続けた。

「だからね、連れてかれちゃった。なんか『お嬢ちゃんも一緒に来い』って」

「そういうことね……」

やっと納得したという調子で、エレニアがつぶやく。  
要するに殿下はあの連中に攫われ、いっしょに居たルーフェアは首尾よく(?)、付いていくことに成功したらしい。

「ともかく戻ろう。ここにこれ以上居ても、仕方ない」

「そうですね。会場も心配です」

エレニアの言うとおりだった。私たちは免れたが、あの爆発だ。会場が無事とはとても思えない。

「行くぞ」

「はいっ」

そうして急いで戻った会場は、まさに地獄絵だった。

ふんだんに使われていたガラスが、爆発で碎けて降り注いだのだろ。かなりの人数がひどい切り傷を負っている。

「エレニア、魔法で手当てを。シーモア、ナティエス、ミル、応急手当くらいはもう、習っているな？」

「先輩、あたしらも全員、いちおう回復魔法が使えます」

「よし。重傷者から手当てして行くんた。出血を止める程度でいいから」

「了解」

ぱつと全員が会場へ散った。

私もあるだけの回復魔法を使い分けながら、参加者たちの手当てに回る。

時々不審がつて尋ねてくるものもいたが、答えているヒマさえなかった。

## Episode:40

「あとは、動かさないように。救急隊が来たら、落ちついて言うことを聞いてください」

必要最低限のことだけ指示しながら、会場を奔走する。

「！」

とある場所で、思わず足が止まった。状況から見て、ここで爆発があつたのだろう。

人の残骸が、飛び散っていた。

いったい、何人分だろうか……。

「……たいよ……」

か細い声に、はっと我にかえる。

少年が倒れていた。

爆風かなにかでやられたのだろう、左腕がなくなっている。

「大丈夫か！」

慌てて駆け寄って、そつと抱き起こした。

すぐに回復魔法をかけてやる。

「僕、どうした、の……？」

「大丈夫、もうすぐ救急隊が来る。そうしたらすぐに、病院へ連れて行ってもらえるから。だから、頑張るんだ」

「うん……」

とりあえず止血できたことを確かめて、近くにいた女性に少年を頼む。

怒りがこみあげていた。

確かにこの国には、いろいろあるのかもしれない。だがそれが、この子になんの関係があるというのか。

おそらく今日を楽しみにして、両親か誰かに連れられてここへ来て、喜んでいただろうに……。

「先輩！」

向こうからシーモアが駆けて来た。

「救急隊、来ましたから」

「そうか」

それならばもう、私たちの出番はそろそろ終わりだろう。

エレニアやナティエス、ミルもこちらへ来る。

全員が血だらけだった。

「あゝあ、せつかくのドレスだったんだけどな。ルーフェイアに悪いことしちゃった」

「まあ、場合が場合だしね。あの子ならわかってくれるさ。

にしても許せないな」

「ほんとだよな」

スラム育ちだと言うこの2人の少女は、惨状に動じた様子はなかった。少し胸をなでおろす。

「それで、殿下の方はどうしましたか？」

「え？ ああ、そつちもあつたか」

むしろ私のほうが、いくらか動転していたらしい。

「だが……どうやって追跡する？」

自問自答する。

いちおうルーフェイアが通話石を持っているが、望み薄だった。

この手のものは真つ先に調べられるし、特殊なもの以外は距離が開

いたら使えない。

それにああいう相手だ。連れて行かれた先もおそらく、結界で通話を遮断しているだろう。

わざわざ攫って行っていることから考えて、すぐに殺されたりということはないだろうが、だからといって手をこまねいているわけにはいかなかった。

と、意外な人物から意外なセリフが出る。

「あ、あたしねえ、クルマ見たよお　それとね、いろいろ言つたのも聞いた〜！」

「本当か？」

「うん」

どこをどう見ているのか分からない能天気な子だが、これで意外としっかりしていたらしい。

## Episode : 41

「よくやった。そうしたら、それを手がかりに……なんと言っていた？」

「えつとね、『予定どおり白い森へ』って。でね、珍しい北地区の言い回し使ってたから、過激派の『神々の怒り』の連中だと思う」

「そこまで、分かるのか？」

これはルーフェイアの人選が、正しかったと言わざるをえない。私たちがアヴァン語を聞いても、区別などつかないのだ。

「それで……その森はどこに？」

「アヴァンシティの北西。別荘地なんだ。ただねえ、ちょっと広いから、細かいとこまでは……」

「十分だ」

これだけの情報が揃ってれば、どうにか割り出せるはずだ。学院の方に頼んでもいいし、タシユアならもっと早く魔視鏡網上の情報から、絞り込んでくれるかもしれない。

「まさかここの通話石で、学院に連絡するわけに行かないな……」

言いながらここの警備用に渡されたものではなく、来る前に学院が支給してくれたものを出す。

こっちでも万全とは言えないが、アヴァン側から渡されたものよりはマシなはずだ。

「シーモア、ナティエス、すまないが報告だけ、してきてくれないか？ 学院のデリム教官が、傭兵隊の指揮を採ってる」

「あ、はい」

二人の声が揃った。

「あとからちゃんと、私が詳細を伝えに行く。だから、簡単にでいいから」

「分かりました」

駆け出していく後輩の背を見ながら、学院に連絡を入れる。

「任務中の、シルファⅡカリクトウスです。学院長に、繋いで頂きたいのですが……」

繋がった先にそう言う相手と相手が代わり、あののんびりした声が聞こえてきた。

「おや、シルファⅡカリクトウスですね。任務はどうですか？」

「トラブルが発生しました。詳細は後で報告しますが……タシユアⅡリュウローンを呼んでいただけないでしょうか？」

「タシユアですか……困りましたね」

向こうで、学園長が口籠もる。

「彼になにか、あったのですか？」

「いえ、ちょっと名指しで任務に就いているのですよ。先ほど発ちましたから、まああと2、3日はかかるでしょうね」

「そうですか……」

こうなると、学院の諜報部に頼むしかないが……正直、あまり信用は出来なかった。

もちろん、そのあたりの素人などは足元にも及ばない。だが学院の諜報部は、タシユアのような学院生に、翻弄されている有り様だ。とはいえ、やむをえないだろう。

「でしたら、学院の……」

「先輩すみません、ちょっと代わっていただけませんか？」

言いかけたところで、エレニアが珍しく割り込んでくる。

あまりこういうことをするタイプではないから、何かあるのだろう。そう思っただけは、急いで彼女に代わった。

「学園長、申し訳ありません。エレニアです。先ほどの話ですが、タシユアの代わりにロアに、伝えていただけないでしょうか？」

聞かない名前だ。ただ言い方から見ると、彼女がよく知る相手らしい。

「ええ、そうです。詳細は彼女に直接送ります。ではまた後ほど」

そう言っただけでエレニアは、通話を終えた。

「タシユアの代わりにロアとは……どういう意味だ？」

さすがに彼女の考えていることが分からず、問いかける。

「タシユアのかわりに、ロアに魔視鏡を使って、調べてもらおうと思います」

ずばりとエレニアが言った。

タシユアと並んでこの年齢で、上級隊に入っただけのことはある。私の、たったそれだけの学園長とのやりとりで、なにをしようとしているのか見抜いたらいい。

だが、ロアにタシユアの代わりができるのだろうか。

そう思う私の表情から、読み取ったらしい。エレニアが言った。

「先輩、心配にはおよびません。ロアは、タシユアと互角ですから。たまに学院の魔視鏡網上で、やりあってますよ」

「それは……知らなかったな」

もっとも自分から、そんなことが得意だと言っただけは、いないだ

ろっが。

どちらにしてもこれだと、当分は情報待ちだろう。

「そうしたら私は、報告してくる。エレニア、情報の方は頼む」  
あまり楽しいことではないが、仕方がない。  
私はその場を後にした。

## Episode : 42 露見

Loa

いきなり学園長室に呼び出されて何事か思いきや、エレニアが連絡してきただけだった。

なんでも、任務中にトラブルが発生したんだとか。

どうもクライアントとルーフェイアが、いっしょに攫われた(?)らしい。しかも爆弾テロまであったんだとか。

んでもってミルちゃん 多分この学院でもトップクラスの有名な人が聞いた情報元に、アジト探せときた。

もちろん学院のほうにも頼んでるらしいけど、まあ学院だから、それなりだし。加えてコトがコトだから、一刻も早くってことなんだろう。

詳細は直接魔視鏡に送るってことだったから、適当な時間を置いて、立ち上げてみる。

あ、これか。

特殊な形式で細切れにされたデータが、送られて来てる。

たぶんこれだろうっていう魔令譜幾つか試してみたら、4つ目くらいで復元できた。

読んでみる。

「ふんふん、なるほど?」

大筋はさつき訊いたとおりだけど、これで探せって、かなりヒドい。過激派の名前に目星がついてる以外は、ほとんど情報ナシだ。

「まったくエレニアも、いっつも気楽に頼むんだから」

ともかくドアの外に「邪魔するな」と書いたプレートを下げ、きっちりカギも閉めた。

「さてつと」

どこから手をつけたもんか、ちょっと考える。  
こういう時いちばん手っ取り早いのは、直接情報を取ること。で、どこで直接情報が取れるかというと……。

ダメ元でとりあえず、通信網に潜り込んでみることにする。

魔視鏡と通話石が作り上げた通信網は、世間でごく普通ってほどじゃないけど、でもかなり広まってる。

で、そこを利用してるものの中には、おおっぴらにやれないこと、っていうのがけっこう多い。

ウソみたいで笑っちゃうけど、「テロ組織　を支援する会」なんてもんが世の中あったりして、そういうのは概して人目に付き辛い、通信網上にもぐりこんでるケースが多かった。

で、そこいらあたりを足跡消しつつ渡り歩いて、情報を少し拾い出す。

感想は　ありがち。

ミルちゃんが見つけたその左翼、どうやらクーデター企ててるらしい。けどこれ以上はさすがに、そこらへんには落ちてなかった。

じゃ、本格的に行こうかな？

今見てたところを足がかりに、接続先の魔視鏡の中を、細かく見てく。

「やっぱあったか」

案の定、ふつうの方法じゃ見られない場所があった。  
そこに網を張って、誰かが接続してくるのを待つ。

ふつうじゃ見られないってことは、裏を返せばここに来るのは、

何か関係がある人間だけ。だったらそれを捕まえて追跡すれば、何か分かるはず。

もう一台の魔視鏡で雑用こなしながら、張った網に誰かかからないか、チェックを続ける。

ほら来た。

流れてくる情報を途中で拾って、ちゃっちやと接続してきたヤツの、個別情報を引っこ抜く。

## Episode : 43

で、抜いた情報を頼りに個人の端末までたどってみると、それなり当たりだった。

網は張ったまま、この魔視鏡の中を漁る。

「……これはいける、かな？」

思わず独り言。魔視鏡の中に、このテロ集団に関係する会話の記録が、ごっそり残ってる。

ほんとにそのままで何の細工もされてないから、速攻で解析してみた。

って……。

この魔視鏡の持ち主は、大したことない。

でも交信相手のひとり、マニアなんだろうか？　ともかくかなりの情報通だ。

危機感も何もない持ち主だから、記録から即座に、事情通の魔視鏡が特定できた。

即刻ターゲットを変えて、通信網の海から探しだす。上手い具合に、接続中だ。

「ふふん、それなり頑張ってるんだ？　でもこれじゃまだまだ甘いね」

思わず魔視鏡に突っ込み入れたりして。

この新しいターゲット、いろいろ気は遣っているけど、まだまだ。この程度の防御じゃ上級者にかかったら、簡単に中へもぐりこまれる。

ボクもまあ、軍に潜り込む程度の技術はあったりするから、あっさり命令権をゲットした。

「  
」  
市販製の防護壁なんてあっという間、ハミングしながらこの魔視鏡の中身を見ていく。

結果は大当たり。

会話記録に、まとめてみたらしい日程、さらに主要人物らしい名前まで残ってる。

せめて消しとこうね。ヤバいことしてるんだから。

とりあえずそれっぽいのをこっちへ写して、接続切ってから、中身を見てみることにする。

「うーん、これ売ったら儲かるかな。あ、違った。『白い森』探すんだった」

とりあえず記録の中をざっと検索して、分類してみる。  
無関係のものも紛れ込んでいてちよつとめんどくさかったけれど、どうにか関係するものを抜き出した。

「けっこう緻密だなあ……あれ？」

一つのファイルを開いたところで、思わず手が止まる。

「ロデステイオ……？」

慌ててこのキーワードで再検索してみた。ピックアップされた記録を片っ端からあたっていく。

結果は　これもありがち。

ようはクーデターを起こそうとしているこのグループと、ロデステイオとが組んだらしい。

で、彼らがアヴァン国内で事件を起して注意を引き付けている間に、ロデステイオ軍があゝの難所の谷を超えて、侵攻しようってことだった。

それで「殿下？」とやらを。

こうなると、あんまり時間がなさそうだ。

もう一回通信網に接続して、こんどはロデステイオ軍の魔視鏡をあたってみる。

「あゝ、もうちょっと、ちよくちよく来とくんだった！」

去年シュマーの一件が片付いて以来、前みたいに遊びに来なくなつてたのが災いしてる。

あたりまえだけど他国へ侵攻しようつていうんだから、それなりに作戦としては大掛かり。それに気づかなかったのは、完全に怠慢つてやつ。

腹いせに軍の内部をあちこち渡り歩いてみて、だいたいのところを手に入れた。

ふうん、なるほどね……。

## Episode : 44

R u f f e i r

車が止まった。

外が見えないようになっていたから正確には分からないけど、どうも会場から、かなり離れたところまで来ているらしい。

「降りろ」

鋭く言われて車を降りると、森の中だった。どうりで周囲が静かなわけだと、納得する。

目の前には、かなりの年数を経た石造りの館があった。けっこう手の込んだ造りをしているから、もともとは貴族かお金持ちの所有だったんだろう。

追い立てられるようにして、屋敷の玄関をくぐる。外からの見た目通り、中も重厚な造りだった。

入ったところのホールに、数人の男たちがいる。

真ん中の男性が口を開いた。

「殿下、ようこそ」

「お前か」

吐き捨てるような一言で、この男性が殿下にとってどんな人物なのか、だいたいわかる。

「これはなんの冗談だ？」

「それは殿下が、いちばんよく知っているんじゃないのか？」

2人が睨み合う。

どうもこの2人、考え方がなにかが対極にあるらしい。ただ事情を知らないあたしにしてみると、完全に理解の範疇を超えた状況だ。

誰か説明してくれないかな。

思わずそんなことを思ったけれど、残念ながらそういう親切な人は、いないみたいだった。

そのまま2人ともしばらく睨みあっていたけれど、ふっと男性の方が先に視線を外す。

「まあいい。いずれカタがつくことだしな。連れて行け」

男が命令すると、周囲の男たちが無言で従った。この中ではそうとうの権力があるんだろう。

彼の横を抜けるようにして、連れて行かれる。

階段を昇り廊下を行き……通された？のは、棟のいちばん外れの部屋だった。

「さあ、おまえはここだ」

男の一人が乱暴に殿下の腕を取って、部屋へ押し込もうとする。

いけない、分断される。

思った瞬間、考えるより先に身体が動いた。

「殿下、いやですっ！」

言いながら、殿下の腕にすがりつく。

「なんだおまえ、ほら、離れろ！」

「いやっ！」

強引に引き剥がそうとする男に抵抗して、力いっぱいしがみつく。

「困ったお嬢さんだ。」

まあいい、別にいつしよでも構わないだろう。見張りもそのほ  
うが、数が少なくて済む」

上位らしい別の男が言って、あたしと殿下は見張り役といっしょ  
に、同じ部屋に放り込まれた。

「ここで大人しくしてるんだ」

大きな音を立てて、扉が閉められる。

「大丈夫か？ 落ち着くまで休んだらどうだ？」

「え？ あ、いえ、大丈夫です」

心配そうな殿下に、慌てて言葉を選びながら答えた。

## Episode : 45

「その、殿下と離れるわけには……だから……」

「そういうことか」

殿下、どうしたんだろう？　なんだかちょっと、無然とした顔だ。

「あの、あんなことして……すみませんでした」

いきなりしがみついたりしたから、気を悪くしたのかもしれない。

「もう二度と、しませんから」

「いや、いい。それに、怒ってるわけでもないぞ」

口ではそう言ってるけど、なんだかやっぱり、少し怒ってる気がする。

それにしてもこの部屋、とても監禁するところとは思えない。いちおう窓には鉄格子がはまっているけどそれだけで、あとはホテルのスイートという感じだ。

部屋の中にいっしょにいる見張りも、どこかのんびりしてて緊張感がない。

あたしたちが子供だから、油断してるんだろうか？

ただ、抜け出せないのは事実だった。あたしひとりならどうにでもなるけど、殿下が一緒じゃそうはいかない。風向きが変わるまでは、否が応でもおとなしくしているよりなさそうだ。

だからと言ってあまり待っていると、こんどは状況が不利になりすぎる。

かなり微妙なところで、判断が難しかった。

この場所を、先輩たちに知らせられるといいんだけど。そうすれば一気に選択肢が広がって、がぜん脱出が楽になる。

でも通話石は、ダメそうだった。幸い取り上げられなかったけど、それは裏を返せば、ここじゃ使えないって意味だ。それに目の前に見張りがある状態じゃ、試すことも出来ない。

先輩たちがここを突きとめてくれることを、祈るだけだ。

とはいえ、それだけを当てにするわけも、いかなかった。

そもそもあの爆弾テロだ。きっと大丈夫……そうは思っているけれど、果たして全員無事だろうか？ もし巻き込まれてたなら、当然こちらの救出どころじゃない。

最悪の場合はあたし独りで突破口を開いてでも、殿下を無事逃がさなくちゃいけないだろう。

部屋をもう一度よく、見まわしてみる。

場所は3階の角。バルコニーはなし。窓にはしっかりと鉄格子。壁は石組み。しかも見張りつき。

おそらく扉の外や廊下にも、見張りがいるだろう。

ちよつと簡単には、いかないな？

あたしだけなら見張りも鉄格子も無意味だ。最上級魔法でも使えば、ぜんぶいっぺんに片付く。

ただ……殿下がいるから、どうにも手が出せない。うかつなことをしようものなら、あたしはともかく、殿下に危害が及ぶ。

できれば今夜のうちに逃げ出したいけれど、見張りがいるから相談もできなかった。

これがシュマーの人間同士なら、古代ローム語の変形を日常語にしているおかげで、普通に会話しててもそのまま暗号なのだけ……。

そこまで考えて、はっと思いついた。

すぐ試してみる。

『殿下、この言葉おわかりになりますか？』

『ローム語か。大丈夫だ』

即座に答えが返ってきた。

ローム語はかつての大帝国、アムロイデの上流階級の言葉だ。それが帝国の絶頂期までに、他国の上流階級にまで広がった。

そしてこの言葉は、いつの間にか上流階級のステイタスにまでなったのもあって、国が滅びても使われ続けている。

だから殿下も、と思ったのだ。

『でしたら、こちらで。たぶん、しばらくはごまかせます』

『わかった』

これでどうにか、込み入った話ができる。

見れば見張りの人が不思議そうな顔をしていたけれど、これは無視することにした。

## Episode : 46

『それで、どうにかなりそうなのか？』

『ムリです。あたしひとりなら、とうの昔に出ていってますけど』  
『というか、あたしだけなら誘拐されないだろう。』

『つまり、僕が足枷ということか。はつきり言うな』

『え？ あ！ す、すみません！』

『いや、構わない。本当のことだろうしな』

殿下、いやに素直だ。

なんて言おうか迷う。でも、殿下が言葉を発する方が早かった。

『それで、本当に方法はないのか？』

『この状況だと、強行突破くらいです。もっとも殿下が……』

『お前ら、何を話している！ こっちにも分かるように言え！』

さすがに頭にきたらしくて、見張りの男が怒鳴った。

「さもないと……」

「さもないと、何をするつもりだ？ だいいちこの程度の言葉も理解出来ないなど、まさに下級としか言いようがないな。」

お前は小学校も出ていないのか？」

えっと……。

どうしてこう、みんな切り返しが上手なんだろう？ あたしなんていつもなにも言えなくて、黙っちゃうだけなのに。

ちなみにこのとんでもない言葉に、怒鳴った見張りの方は切れかかっていた。

確かに普通は怒るだろうな。

それなのに殿下、平然としている。

しかも更に一言。

「それに僕に傷でもつけようものなら、仕置きを受けるのはお前じやないのか？」

こう言われてはさすがの見張りも、手を出すことは出来ないようだった。

「さて、邪魔ものは黙ったようだから、改めて続きを話すか」

殿下ときたら、見張りに分かるように、わざとアヴァン語で言うし……。

「魔法はムリだが、僕も一応杖術と格闘技は使える。自分の身くらいなら守れるぞ」

ローム語にスイッチして言った殿下の言葉は、けっこう意外だった。

「本当ですか？ でしたら、頃合を見計らって脱出しましょう。

そうですね、明け方少し前くらいに行動を起せば、それなりに楽でしょうし」

殿下が自分で自分を守れるなら、どうにかなるだろう。

「分かった、お前の言うとおりにしよう」

ほんとにどうしちゃったんだろう？ 2、3日前から殿下、話をするにあの顔合わせの頃の調子がない。

でもこのほうが、今はありがたかった。

『でしたら、今のうちに休んでおいてください。時間になったら、起こします。』

それからイザとなったら、あたしが囹になります。殿下は先に逃げてください。』

『なんだと？ お前を見殺しにして逃げると言っのか？』

殿下の声が厳しくなる。

けど不思議とあたしは、平静だった。

『そのとおりです。』

そのためにあたしたちは、雇われたのですから  
『覚悟は、出来ていた。』

## Episode : 47

Sylpha

学院からの報告に、驚くしかなかった。

「あれが陽動、なのか？」

「ロアの話では、そのようです」

送られてきた資料を、全員で細かく見ていく。

「確かに素人が立てたにとしては、この作戦は緻密過ぎるな。ロデステイオが裏についているほうが、よほど納得できる」

「そうですね。ロデステイオの軍も、2段構えで展開するようです……」

それにしても、誘拐も爆弾テロも陽動の一部とは、あまりに大きすぎる規模だ。

「ねえねえ、どーゆーことなの？ ミルちゃんわかんない！」

とつぜんの、真後ろからのつんぎくような嬌声に、耳が痛くなった。

本当に状況を理解していないのだろうか？

かといってこのまま放っていいおいては、延々と騒ぎつつけるかもしれない。だが私の説明で、果たしてミルが理解できるかどうか……。

どうしたものかとエレニアの方を見ると、彼女は「わかった」という風でうなずいた。

「静かにね。いま説明してあげるわ。」

殿下とルーフェイアを攫ったのが、過激派の『神々の怒り』なの

は、もういいわね？」

「うん、それは知ってる」

「そこがロデステイオと裏で手を組んで、クーデターを企んでるらしいわ」

「あ、そなの」

ミル……。

他のメンバーも絶句する。

「ちよつとあなた、『そなの』って……」

やはり呆れたエレニアが嗜めようとしたが、ミルのほうが一枚上だった。

「あれ、エレニア先輩知らないの？ この国これでね、こういうクーデターまがいつてしよつちゆうなんだ」。

けど、ロデステイオと組むのは、初めてかなあ？ 行くとこまで行っちゃったみたい」

けろりとした顔で言い放つ。

「そう……なのか？」

「うん」

アヴァンってけっこー古い国でしょ？ だからね、そのデントーとかをまもろー！ ってのと、そんないいから発展だー！ ってのとが、しよつちゆうぶつかってるし」

「それは、知らなかったな……」

伝統に彩られた美しい国だとばかり思っていたが、内情はかなり複雑なようだ。

「……大人の考えることなんて、どこ行ってもくだらないね。まあいいけどさ」

どういふ過去があるのだろう、シーモアは斜に構えた調子で酷評

する。

もつとも学院の生徒は、小さい頃に大人から酷い目に遭わされているのが大半だろうが。

「それで先輩、これからどうするんです？」

「殿下が攫われたことはまだ伏せられてるけど、一部の報道関係に、この資料を見ると手が回ってるわ。

そこから話が漏れるのは、時間の問題ね」

そうなったら、アヴァンの国民も報道も、すべての目がそちらを向くだろう。

当然だがそれ以外のところは、関心が薄くなる。

「殿下が監禁されていると分かれば、搜索と救出をしないわけにいかない。警察と軍が動く」

だがこの国は、軍の規模が小さい。今でも国境線の警備だけで手一杯なのに、両方問題なくやれるとは、とても思えなかった。

## Episode : 48

「で、軍が動いたのを見計らって、国境線を越えるってワケですか？」

「ああ」

海に面したこの国は、背後が急峻な山脈に守られていて、侵攻ルートが限られる。

だが国内の騒ぎで守りが手薄になり、情報も錯綜となれば、まず間違いなく突破されるだろう。

この国では二正面作戦には耐えられないのを、承知の策だった。

エレニアが続ける。

「資料によれば、アヴァン国内が混乱するのを待つて、ロデステイオの特殊部隊がまず侵攻。」

ルート上の小都市を制圧しながら、第2陣で正規陸軍が展開するようね」

「市内を混乱させてなんて、ひどすぎ。」

そんなことしたら、またあたしたちみたいな孤児が増えるじゃない」

ナティエスが苛立たしげに言った。

「まったくだね。」

けどそんなの簡単、止めりゃいいのさ。未然に防いじまえば、全部チャラになる」

どこか獰猛な表情を浮かべて、シーモアがさらっと言った。

「まあ、そうだな」

極論だが、間違っではない。

ロアが送ってきた資料は実に詳細で、多岐に渡っていた。なにし

る殿下の監禁場所まで特定されていた。どうやら関係者が、迂闊にも書き残していたらしい。だから、すぐにでも手は打てるだろう。この件自体が伏せられているから秘密裏に動くしかないが、幸いシエラの傭兵隊は、そういうことには適している。

「総指揮のデリム教官に、進言してくる」

「そうしたら私たちは一旦屋敷へ戻って、念のために装備を整えておきますね」

口ではそんなことを言っているが、エレニアの表情は、自分が行くつもりだと語っていた。

「頼む。それからシーモアたちは……」

「あ、せんばあい！」

言いかけた私の言葉を、ミルが遮った。

「……なんだ」

つい、声が冷たくなる。差別するつもりはないが、なにしろこの子には、ずっと振り回されっぱなしだ。

「あーもう先輩ひどおい、いじわるー！ この屋敷行ったことあるけど、教えてあげないから！」

「本当か？！」

予期せぬ幸運だ。ルーフェイアの言うことをきいて、この子を同行させた甲斐があった。

「むかしね、見学したことある」。

あ、でも、お父さん殿下のほうが詳しいかな？ ちょっと待ってー」

嵐のようにミルが飛び出して行って、私たちは取り残された。

「よく分からない子ですね……」

エレニアがもつともな感想を漏らす。

「でもミル、いつもよりはマシだよね？」

「だね」

台詞を聞くかぎり、クラスがいつしよの後輩たちは、よほど振り回されているようだ。

ほどなくして、ミルが戻ってきた。

「お父さん殿下に、話ついたよー。隠し通路とか載ってる秘蔵の地図があるから、出してくれるって」

何かこう、ちよつと出前でも頼んだような気軽さだ。

「あの王太子を、どうやって説得したのさ」

「えへへ、ないしょー」

まともに考えるだけ無駄な気がしてきて、私は話を戻した。

「さつきも言ったが、デリム教官の所へ行ってくる。おそらく出ることになるだろうから、エレニア、準備しておいてくれ」

「了解です。先輩が戻り次第、出られるようにしておきます」

エレニアの冷静な微笑み。

「シーモアたちは、待機を……」

「えー、先輩冗談でしょ？」

「見くびりすぎですよ、それ」

いっせいに抗議の声が上がった。

「気持ちは分かるが、実戦だ。出すわけに行かない」

「この手のことならあたしら、スラムに居る時さんざやりましたよ？」

「だよね」

平然と、シーモアとナティエスが言い放つ。

「爆破とか、やったもんなあ」

「密売人も、追い出したよね」

聞いてはいけないものを、聞いてしまった気がする。

まあシエラのAクラスに入っている時点で、たいていは生半可な経歴ではないのだが……やはり何か、納得は出来なかった。

とはいえ、作戦に割ける人数もおそらく限られなかでは、貴重な戦力だろう。

「分かった、その辺も進言してくる。とにかく準備しておいてくれ」  
「了解です」

全員が、戦う顔になる。

「久々に暴れられそうじゃないか」

「そうだね。スラムと違って、学院って大人しいんだもん」

頼もしいことを言う後輩たちの声を背に、私は部屋を出た。

## Episode : 49 反撃

N a t t i e s s

パーティー会場から殿下の屋敷へ戻って、そのあと準備して。作戦決まって許可出るのにちよつと時間かかったけど、命令が出てすぐに直行。着いたの、綺麗な森の中だったの。

任務じゃなかったら、サイコーなんだけどな。

こんど夏休みにでも、遊びに来るのにいいかも。

それにしても、あんなヒドいことする連中がこんな綺麗な森の中にいるの、なんだかすつごく許せない。

屋敷の方は、それなり大きかったり。

それにちよつと面白い造りしてて、平屋みたいな玄関（中身はホールなんだろうけど）の後ろに、3階建ての口の字型の母屋（？）が続いてた。

「向かって右奥、3階の部屋だな」

シルファ先輩が、もういちど確認する。

「うん、それでいいです」。だってあの部屋、昔ね、この屋敷の当主がおかしくなっちゃって、閉じ込めといた部屋なんだよ。

だからね、鉄格子とかついてて、逃げられないんだよ。」

ミルってば楽しそうに解説してくれたけど、なんかそれって「出そう」でやかも。でも、分かりやすいのは助かるかな？

ちなみにあたしたちが立てた作戦は、わりと単純。あたし、ミル、そしてシルファ先輩が表からの陽動。シーモアとエレニア先輩が、その間に裏から入って救出。

もちろんあたしたち陽動部隊も、頃合いを見計らって、屋内には

入るんだけど。あと陽動部隊は、シエラのほかの先輩たちも、加わってる。

教官まで来ちゃったけど。

ホントはあたしたちだけが良かったけど、それはさすがに通らなかった。

「本当におまえたち、打ち合わせどおりやれるのか？」

「だからさっきも言ったじゃないですか。そーゆーの、散々スラムでやりましたっば」

信じてくれない教官に、言い返してみて。

シーモアはもう、エレニア先輩といっしょに、館の裏手へ回ってる。

びっくりしたのは、先輩たちに関錠とか上手な人が、いなかったこと。任務が警備だったから、用意してなかったみたい。

けどシーモアはそういうのすつごく得意だから、きっと今ごろ、シーモアがしっかり裏口の鍵、開けてるんじゃないかな？

「任務だからやむをえないが……絶対に、ムリはするんじゃない」

「はい」

あたしとミルが声そろえて答えたら、教官、下向いてこめかみ押さえちゃった。

「私からも頼む。無理はするな」

おんなじことだけど、シルファ先輩に言われると、なんか嬉しいかも？ けど実言うと先輩、この作戦立ててから、ずっとこんな感じだったり。

「だから先輩、だいじょうぶですってば。こうみえてもあたし、シ

「モアと一緒に、スラムで抗争とかやってたんですよ」  
言ったら、シルファ先輩が目を丸くした。

「そう……なのか？」

「です。」

あ、スラムとかのあーゆーのって、子供同士だから容赦ないんですよ。火器とかもばんばん使っちゃうし」

さすがにシルファ先輩も、スラムの細かいことは知らないみたい。なんか、黙っちゃったし。

「大人相手のほうが、油断してくれるから楽なくらいかな？」

じゃ先輩、ちよつと騙してきますから。ミル、ちゃんと援護射撃してね？ あと、適当なところで来てよ？」

「まかせといて！ んじゃ行ってらっしゃい」

ミルの声援を受けて、屋敷に近づいた。

## Episode:50

いまあたしが来てるの、可愛い感じのブラウスにエプロンドレスだつてこれならどう見ても、戦争しに来たようには見えないもの。ついでにミルのバスケット　なんでこんなもの持ってたんだろう？　まで、借りてきちゃってるし。

そしてあたし、そこら辺の土をちよこつと手にとって、顔や服になすりつけてみて。

これで「迷子の少女」の出来あがり

あとはあたしの演技力？

見張りがけつこう多いけど、ここからが腕のみせどころ。

明かりの届いているところへ踏み出したら、兵士(?)たちが一斉にこつちを向いて。

「止まれ！　何をしに来た！」

「きやあつ!!」

口元に両手をあてて、悲鳴上げてみたりして。

ちようど上手い具合にライトが当たって、「びっくりしてる少女」が闇に浮かび上がった。

いいかも

「なんだ、子供か……」

「ちよつと待て。子供だろうがなんだろうが、どうしてこんなところにいるんだ？」

その疑問、もっともよね。

だから早速あたし、泣きそつな顔をしながら答えてあげたの。

「み、道に迷って、帰れなくて。ずっと歩いてたら、こっちに明かりが見えたから……」

途中で泣いたフリして、その涙をぬぐってみせる。こうすれば頬に涙と泥のあとが残って、けっこう可哀想に見えるのよね。

「おねがい、助けて……もうあたし、歩けない……」

その場へ座りこんで、泣きじゃくってみた。

これはルーフィアの方が、上手なんだけど。

でもあたしだって、彼女見ながら勉強したんだから。

その甲斐があつたのかな？ 見張りが周りへ集まってきた。

「おい、どうする？」

「どうするって言われてもなあ……けど、このままってのも可哀想だしよ」

わいわいがやがや。

けど警備してるはずなのに、こんな調子でいいのかな？ そりゃこっちは助かるけど。

さあて、と

隠し持っていた苦無を、そつと取り出す。ちなみに毒つき。

「なあお嬢ちゃん、悪いがここ、泊めらんねーんだ。どつか送つてやつからさ、それで勘弁してくんねえかな？」

バカなやつ。

泣いてるあたしを慰めに、わざわざしゃがんで抱き寄せるなんて。

「え、あ、なんでもいいです……」

そう言いながら苦無を、男の腹部に突き立てた。

「ぐ、な、なにを……」

「きゃあああ〜っ！〜！」

男の眩きを悲鳴でかき消して。

あたしが離れると支えを失った男の体がくずおれて、傍目から見ると「突然どうかなくなってしまった大人から、驚いて離れる子供」という状況になったの。

「いやいや、いやあぁっ!!」

ついでだから、パニック起こした風に叫んでみたり。

「なんだ、どうしたっ!!」

同時に屋敷から少し離れたところで、どんっという爆発音。

ミル、ナイスタイミング

これで完全に、見張りたちの注意が向こうへ行く。

## Episode : 51

「敵か?!」

「わ、わかりません!」

「あっちだ、あっちで爆発があつたぞ!」

「何をしている、持ち場を離れるな!」

そこへさらに銃声。

ミルが何を思ったか、早々に撃つたみたい。まあきつと、なんか命中させてるんだろうけど。

思わず門へと殺到した見張りたちの前に、今度は人影が立ちはだかった。

風を切る音。閃く銀光。

絶叫を上げて見張りたちが倒れた後には、サイズ（大鎌）を構えたシルファ先輩の姿。

凜々しい

見張りたちに同情する気なんて、さらさらなかった。

あんな風にテロをやる連中、市街戦をやるうなんていう連中、さつさと死んじゃえばいい。

あそこにはやな貴族もいっぱいだったけど、この日だけはOKってことで、子供だってけっこういたんだから。それがあの爆発のせいで、バラバラにされちゃった。

こいつらあたしたち子供のこと、獣の仔みたいにしかなってないんだ。

大人なんて、信じないんだから。

スラムにいた頃とか、あたし嫌っていうほどそーゆー目に遭った

んだから。

ともかくあたしも、負けてられないよね。

多分玄関から飛び出してくるはずの連中を待ち構えて、壁にぴたりと張り付いて。

勢い良くドアが開いて、サブマシンガンを構えた大人たちが出てくる。

「ばゝか」

そうつぶやいて、2本ばかり苦無を投げてみて。

たちまち即効性の猛毒にやられて、2人倒れる。

「なんだ、どこだっ！」

「なんでしょゝ ミルちゃん知らないでゝす」

さすがに大人たち、これには度肝抜かれて硬直。しかもすかさず、ミルってば連射銃を乱射。

たちまち人数が半分以下になる。

さらに先輩たちが前へ出て刃を振るったら、敵とかもうほとんど残ってなくて。これで警備って言うんだもの、バカにしてるよね。

そんなこと思っていると、突然頭上で雷が閃いた。でも雷雲なんてない。空は満天の星だもの。

なのに2度3度、雷は閃きつづける。

そっか、ルーフェイアだ。

確かによく見ると、ミルが「監禁されている」って言ってた部屋のあたりだもの。きっと彼女、合図代わりに魔法使ってるんだらう。

そうすると、もうちょっと派手にいったほうがいいよね？

バスケットの中に入れておいた、小型の爆弾の安全装置、外して

みる。

それをまず中へ放り込んで……それからあたしたち、屋内へと踏み込んだ。

## Episode : 52

R u f f e i r

ふつと目が覚めた。

なにかが、動こうとしてる。

戦場でよく感じた気配だ。この感覚の後は大抵、奇襲をうけることが多かった。

室内はまだ明かりが点けられていて、起き上がると目立つから、いつでも動けるように体制だけ変える。

(どうした?)

いっしょに寝ていた殿下が、そつと聞いてきた。怖がるフリをして、上手く殿下のベッドに潜り込めたから、何かと便利だ。

(分かりません。でも、何かありそうで……)

(そうか)

時間はよく分からないけど、まだ夜明けにはだいぶありそうだ。2人に増やされた見張りが、片方は寝ていて、もう片方も眠そうにしていた。

外から話し声が聞こえる。どうもこの夜半に、誰か尋ねてきたらしい。

耳をそばだてる。

どうも女の子が道に迷って、ここへ泊めて欲しいと懇願しているようだった。

けど、この声。

どう聞いてもナティエスの声だ。とすると、先輩たちここを突きとめて助けにきてくれたんだろう。

だとすると全員、テロに巻き込まれないで済んだんだろうか?

と、どおんという爆発音が響いた。

「な、なんだ??」

驚いた見張りのひとりが、半分寝ぼけながら窓へ駆け寄った。  
あたしもとつさに起き上がる。

「ルーフェイア、何が起こった」

『殿下、ベッドの下へ。細かいことはわかりませんが、安全とは言えないようですから』

こちらには古代ローム語で答えておいて、見張りの様子をつかがう。

「まったく、なんだってんだ?」

銃声。ガラスの碎ける音。

窓の外を見ていた見張りが、倒れる。

「おいどうした……うわぁっ!」

慌ててそばへ寄ってみたものの、眉間に穴が開いて絶命している仲間に、残った見張りが驚いて叫ぶ。

その隙を、あたしは見逃さなかった。

一挙動で間合いを詰め、味方の惨状に思わずのけぞった見張りへ肉薄する。

鳩尾に左の蹴りを叩きこみ、さらに身体をくの字に曲げた男の首筋へ、両手を組んで振り下ろした。

骨の折れる鈍い音。でもあたしの力で、しかも武器がなくては、大人の男性相手に手加減できない。

結局声も立てずに、この男も床に倒れた。

「シエラの凄さは聞いていたが、噂以上だな」

ベッドの下から出てきた殿下がまず言ったのは、この言葉だった。けっこう肝が据わっている。

「このくらいは、学院生なら大抵できます」

なにしろ小さい頃から、傭兵としての訓練が続けられるのだ。この年齢　特にAクラス　ともなれば、それなりの戦力にはなる。

「えっと、1、2分、時間をいただけですか？　ちょっとこれじゃ、戦えないので……」

「今戦っていなかったか？」

殿下に突っ込まれたけど、このままというわけには行かないから、急いで動きづらいたけのドレスを脱いだ。ミルあたりなら平気そうだけど、あたしはあんまり、ドレスで戦う趣味はない。

下は当然戦闘服。ドレスが裾の広がるデザインだったおかげで、ツールキットまで入れたポーチもつけてあった。

ついでに太ももに止めておいた小太刀を外して、腰につけなおす。さすがにほっとした。やっぱりこの状況で丸腰というのは、どうにも落着かない。

## Episode : 53

「たいしたもんだな」

「え？ 普通、かと……」

警護のためにいるのだから、いつでも戦えるようにしておかなかつたら、意味がないんじゃないだろうか？

やっぱりこういう由緒ある人は、平和で感覚がずれてるらしい。

「そうだ。殿下、これをどうぞ」

予備に、くらいの気持ちで持ちこんでいた格闘用のグローブを、殿下に渡す。どうせあたしは小太刀があるから、格闘技は蹴り技主体で、拳は殆ど使わない。

そして気が付いた。

脱いだドレスを丁寧にたたむ。

「殿下、すみません。せっかく……用意して、いただいたのに」

自分のならこの辺へ置いていくところだけど、借り物じゃそうはいかない。

「構わん。文句ならあとで、この連中に言うことにする」

言うひま、あるだろうか？

「すみません。あの、とりあえず殿下が、持っていてくださいますか？ あとできちんと……洗って、お返しますから」

たたんだうえで、キットに入れておいた細い糸でしばったドレスを、殿下に手渡す。

「気にするな。今度はもう少し、マシなものを用意してやる」

それは……ちょっと違うような？

「それで、どうやって出るんだ？ 鍵がかかっているだろう？」

「だいじょうぶです」

そう言ってまず、あたしは窓の外に低位の雷系魔法を立て続けに放った。これを見れば先輩たち、あたしたちがどのあたりに監禁されているか、分かるはずだ。

それからドアに張りついて、廊下の様子をうかがってみる。人の気配はなかった。さすが素人、あっさり陽動にひっかかったらしい。

「殿下、下がっていただけますか？」

重厚な作りの木製のドア。

普段だったら簡単に魔法で破壊するところだけれど、今は殿下を巻き込めないから、その方法はムリだ。

とすると。

ドアの前で呼吸を整えて集中する。憑依させっぱなしの精霊に意識を向けて、その力を呼び出していく。

限界まで集中して狙いを定めて……。

「哈っ！」

一点めがけて蹴りを入れると、思惑通り中央部が割れた。あとは2、3回蹴飛ばしただけで、脱出口が出来あがる。

これで本当に、閉じ込めた気にいるんだもの。

いつでも出ていけるの、気が付かなかったんだろうか？

周囲の気配に気を配りながら、あたしが先に出る。

幸い辺りには、廊下を曲がった先も含めて、気配はなかった。

「殿下、どうぞ。今なら大丈夫です」

「あ、ああ……」

なんだか呆然としている殿下を、部屋の外へと促す。いつまでもこの部屋に留まっていたら、よけいに危ない。

「で、どっちへ行くんだ？」

「どこにも行きません」

そう言いながら、あたしは隣の部屋のドアを開けた。

勝手知ったる場所ならともかく、これだけ広い他人の家をウロウロしたら、迷うのがオチだ。何より救出に来るはずの先輩たちと、行き違ってしまっだろう。

だから隣あたりの部屋に潜んでいるのが、この場合は妥当だ。他に手段がないならまだともかく、殿下を危険にさらすわけにはいかない。

## Episode : 54

部屋の中へ入って、鍵はかけずに扉だけ閉める。それからそっと窓へ忍び寄って、外を覗き見た。

闇を通して、何人もが倒れているのが見える。それに屋内からは時々爆発音まで聞こえるから、陽動部隊はそうとう派手にやっているらしい。

この調子なら救出隊　きつと二手に分かれてるはず　は、じきに来るはずだ。

「あ、殿下。えっと……掛けて、待っててください。あたしはこれから、外へ行ってきました」

けど、答えがない。

「殿下？」

「お前たちはいつも、こんなことをしているのか」  
厳しい声。

「こうやって人を殺すことばかり覚えて……学院というのは、いたいなんなんだ！」

「そのシエラ学院の傭兵隊を、アヴァンは頼りにしています」  
そう言い返せたのはたぶん、学院をそんな風に言っただけでよかったからだろう。

あたしにとって学院は　夢、そのものだ。

「それにご存知のとおり、学院生のかなりの人数が、親と縁の薄い者ばかりです。

あそこへ行くことがなかったら、もうとっくに死んでいたかもしれない。そんな人ばかりなんです」

「……………」

殿下が言葉に詰まる。きっとそんな世界は、想像を遥かに超えているんだろう。

でも、事実だった。シルファ先輩も、エレニア先輩も、ロア先輩も、シーモアも、ナティエスも、みんな親なし子だ。

「これがいちばんいい……そうはあたしも言えません。けど、生きられただけ、衣食住に困らないだけでも十分なんです」  
「だが……」

殿下の言いたいことも分かった。けど学院生のほとんどは、ほかに選択肢を持たなかったのだ。

「……殿下」

「なんだ」

「もし殿下があたしたちをそのように思われるのなら……貧しさと戦争とを、なくしてください。」

それがなければこんな目に遭わずに済んだ、それが殆どなんです。  
孤児は」

分かっている。これがそんな簡単に無くせないことなんて。ただそれでも、言わずにはいられなかった。

たぶん……殿下に知ってほしかったのだ。

今はもう権力を失ったとはいえ、神聖アヴァン帝国の末裔というだけで、そうとうの影響力はある。だからこそ分かってほしかった。自分ではどうすることもできずに、戦争の中や社会の底辺で潰されていく子供たちがいることを。

明日の夢を、強引に断ち切られる命があることを。

奇妙に長い、僅かな沈黙。

「……わかった。そうしよう」  
それが殿下の答えだった。

「実を言うと」

「殿下、ルーフェイア！」

なにか言いかけた殿下の言葉に重なったのは、エレニア先輩の声だ。

「先輩、ここです！」

大声ではないけれど分かるように答えて、そっとドアを開ける。

「無事なのね？」

「はい」

思っていたよりずっと早く、先輩とシーモアとが来てくれた。すぐに殿下を引き渡す。

## Episode : 55

「ルーフェイア、こっちからシルファ先輩たちがくるから、行つて合流してくれるかしら？ 私たちは殿下と一緒に、もと来た道順で外へ出るわ。」

そうそう、これ、あなたの太刀よ」

つまり、あたしに単独で陽動をやれと言っただろう。

もつとも屋内にいた敵うち、かなりが出払つてるみたいだから、別にムチャを言っているわけじゃない。

「了解しました。できるだけ派手にいくようにします」

使いなれた太刀をうけとりながら、先輩に答える。

「頼むわ。でもムリだけは……しないようにね？」

「はい。先輩たちもお気をつけて」

そう言つて二手に分かれた。

今度は……足枷がないから思いつきりいけるだろう。

向こうの角から飛び出してきた相手に、あたしは太刀を構えた。

さほど訓練もしていないかのような不安定な刃をよけて、あっさり切り伏せる。

「ルーフェイアっ！」

死角になっている方向から鋭く呼ばれた。シルファ先輩の声だ。もうひとり残っていた敵を薙ぎ払ってから、そっちへ視線を移す。

「先輩！」

視界にシルファ先輩、ナティエス、ミルの姿が入る。さっきエレニア先輩とシーモアにも会ったから、これで全員だ。

「無事か？」

「はい。先輩たちのほうこそ、なにもありませんでしたか？ たぶん テロがあったと、思うんですけど」

目の前にいるのだ。大丈夫なのはわかってたけれど、やっぱり心配で尋ねてみる。

「ああ。かなりひどかったが、私たちは全員、無事だ」  
「よかった……」

ほっとする。あの爆発はかなり大きかったから、巻き込まれたら命だって危なかった。

「ともかく行こう。陽動だから、派手にいくぞ？」

「あ、はい」

返事をしてふっと思いつき、呪文の詠唱を開始した。

「空の彼方に揺らめく力、絶望の底に燃える焰、よみがえりて形を成せ フラールブリ・クワツサリーっ！」

「なにっ！」

炎系でも最上級なのが悪かったのか、シルファ先輩が慌てる。でも魔法のほうは思惑通りで、幾つか先の部屋が瞬時にして消えうせた。

「ルーフェイア、これじゃ火災に……」

その辺はぬかりはない。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ フロスティ・エンブランスっ！」

上級の冷氣呪文を放って、熱くたぎっていたそこを瞬時に凍りつかせる。これなら火災の心配は無用だ。

「はっで」

ミルが歓声をあげる。でも彼女に、言われたくないかもしれない。  
「こんどはどっちだ！」

この騒ぎに、残っていた敵が駆けつけてくる。  
そこへあたしは、無言で突っ込んだ。

太刀が閃く。

一閃、二閃。

あがる絶叫。

呆れるほどに弱い。

「さっすが。じゃああたしもかな？」

声と同時に気配を感じて、あたしはすつとよけた。苦無がわきを  
通りすぎて、向こうの敵に突き刺さる。

即効性の毒が塗ってあったんだらう、その敵はたちまち倒れた。  
その間に、もうひとり切り伏せる。

## Episode : 56

「ルーフェイアっ!」

先輩の声と共にまた背中に気配を感じて、身体をずらす。さつきまであたしがいたところを、サイズの刃が薙いだ。

血しぶきがあがって、再び敵が倒れる。

全部が片付くまであつという間だった。

「よし、戻ろう」

「はあい」

ミルが緊張感の欠片もない返事をする。これで意外にもやるのだから、世の中というものはわからない。

飛び道具を持つナティエスとミルとがまず敵を掃射し、そこへあたしとシルファ先輩が突っ込んで残りを片付ける。

あたしも、覚えようかな？

最前線ではすでに、銃は時代遅れだ。手から離れて飛ぶうえ弾は小さいから、持ち主の魔力をちゃんと伝えず、相手の魔法障壁を上手く破れない。だから用途はせいぜい、威嚇くらいだ。

でも、前線を離れれば話は違ってくる。

一般の人は魔法障壁を、常時展開なんてしてない。訓練しなければ出来ないし、それを補助する道具もかなり高価だ。だから十分、銃は通用する。

でも、いちいち武器を持ち変えるのは、隙が大きいし……。

そんなことを考えながら、目くらましに魔法を放ち、階段を一気に飛び降りて切り込む。

そうやって思ったほど時間をかけずに、1Fのホールまで降りた。  
全員が止まる。

おそらくここに残っていた敵の全部と、あの男。

「やってくれたな。だがここまでだ。もつとも殿下の居場所を教えるなら、多少は考えてもいいが」

「断る」

シルファ先輩の即答。

「ほう、命が惜しくないのか？」

「あんな真似をする連中に、命乞いなどしない。だいいち、する必要もない」

先輩が、やはり毅然と返す。

「小娘どもが言うな。まあいい。この腐った国の連中に味方したのが、運の尽きだったな」

「ば〜か」

割って入って、とんでもない一言を返したのは、ミルだった。

「自分が腐ってるから、そう見えるんでしょ？ だから何？」

朝起きて、ご飯食べて、仕事して、子供の面倒見て、友達と話して、家へ帰って、みんな夕食にして、ゆっくり寝て。

そのどこが腐ってるのよ？」

一気に言いたてる。

## Episode : 57

「伝統が全部正しいなんて言わないよ。けどね、壊せばいいってもんじゃないでしょ。」

ましてやそれを、自分が権力につく手段に使おうなんて、どうやっただってバカのことじゃない。

あたしね、この国壊そうとするやつ、許さないから」

いつものミルとは、まったく違った。

「まだおシメも取れてないようなガキが、許さないだと？ 面白い冗談じゃないか」

「黙った方がいいんじゃない、ヴィクターズ」マヴァウリー「ド」ファレル？」

この一言で、男の顔色が変わる。

「貴様いつたい……！」

「さあね」 あ、そだ。シルファ先輩、思いつきりやつちゃっていいですよ。こいつ、ほんととクスなんだ。

継承権欲しくて、過激派と組んでテロまで起こすんだもん」

「言わせておけば ！」

けど、あたしのほうが早かった。

「カーム・フィールド！」

まず範囲をかなり絞った無効化魔法を、シルファ先輩、ナティエス、ミルの3人に一気にかける。

これだとしばらく回復魔法も通さないけど、一方で強力な魔法を遠慮なく使える。

次いで。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ　フロステイ・エンブランスっ！」

ホール中に、文字通り冷気の嵐が吹き荒れた。冷気系の魔法は建物を破壊しないから、屋内での使い勝手はいい。

けど、人間はタダじゃすまない。術者のあたしや無効化魔法のかかってる先輩たちはともかく、それ以外は大混乱だ。

「ナティエス、ミル、今のうちに脱出するんだ」

状況を見て取ったシルファ先輩が、的確な指示を出す。

「はいっ！」

2人が混乱の真っ只中を駆け抜けて、外へと向かった。あたしと先輩も、武器を振るいながらすぐに続く。

「じゃあね、ヴィクターズ　今度はきつとないんじゃないかな」

「

ミルが長銃を乱射しながら、例の男の傍を突破する。

2人の視線が合ったように見えた。

「……そうか、そういうことが……」

まるで地獄の亡者のような声で、ミルにヴィクターズと呼ばれた男がうめいた。

「貴様ら、親子で……それなら……」

なにかに取り憑かれたような表情。

同時に聞こえたぴしりという亀裂音　なぜ聞こえたのだろうに、とっさに呪文の詠唱を始めた。

間に合うか？

一瞬よぎった思いを振り払って、魔法に集中する。

「エターナル・ブレス！」

最強の防御魔法を、ナティエスとミル、それにシルファ先輩に放つ。

理由は分からないけど、あたしは昔から、同じ魔法なら複数同時にかけられた。それは普通じゃありえない事で、とても怖かったけど、こういう局面でいつも役にたってる。

ただ、これ以上はムリだ。もともと微妙なこの防御魔法は、あたしにまでかける余地がなかった。

でも先輩とナティエスとミルは、耐えられるだろう。そして、建物が崩れた。

## Episode : 58

Seamore

エレニア先輩と2人、どうにか敵にも出会わずに、殿下を外へ連れ出すことができた。

ラッキーだったってのがまあ、適当かな？

「とりあえず、ここまで来れば一安心ね」

「ですね」

後は向こうの木立の中に停めてある車まで行ければ、殿下だけは無事返せるはずだ。

「殿下、申し訳ありませんが、もう少しだけ走って頂けますか？」

「わかった」

殿下ってはどうしたんだか、やけに素直だ。ルーフェアになんか、言われでもしたのかね？

ただ、抵抗しないのは助かる。

屋敷の方からは、さっきから豪快な爆発音が聞こえてきてた。どうもルーフェアのやつ、片っ端から上級呪文ぶっ放してるらしい。ともかく陽動の先輩たちやルーフェアがド派手にやってくれてるお陰で、こっちはメチャクチャに楽だ。

暗がりを縫うようにして屋敷の周囲を回り、表側へと出る。

「まだ来てないわね」

「ええ」

エレニア先輩の言う通り、陽動部隊はまだ屋敷の中だ。

「仕方ないわ。第2案通り、先に戻りましょう」

できれば全員で戻りたかったけど、殿下の安全が最優先だろう。

と、いきなり声かけられて、心臓跳ね上がるほど驚く。

「おまえたち、遅いではないか」

って、おっさんなんだってここに……？

「父上？」

殿下も意外だったらしい。ちよつとつわずったみたいな声をだしてる。

「無事だったか。さあ、急いで屋敷へ戻るぞ。」

お前たち、ご苦労だったな。明日の任務に遅れるでないぞ」

このクソ親父！

クライアントじゃなかったら、ぶん殴ってやるところんだけどね。

「父上、それはないでしょう？ 彼女らは命懸けで僕を救いに来たんです。だいいち、まだ仲間が残っています」

はい？

殿下、なにか悪いもんでも食べたか？

「シエラの傭兵隊など、放っておけば勝手にやるだろう。帰るぞ」  
「帰りません」

まさか途中で、誰かと入れ替わったってことはなさそうだし……。うーん、やっぱお気に入りのルーフェイアが、心配なんだろうか。

## Episode : 59

「彼らが全員無事に戻るまでは、僕はここにいますから」

あ？ 全員ってなんだいそれ？

どうも調子狂うね。

けど今は、のんびりしてられる状況じゃない。エレニア先輩が、殿下に促す。

「殿下…… お心遣いはありがとうございますですが、ここはファレル卿の仰る通り、先にお戻りください。その方が安全です」

「だが……」

まだ渋るとか、いったいどうなってるんだか。

だいいちこつちが「戻れ」って説得するなんて、奇妙としか言いようがないじゃないか。

「殿下、私たちは全員、訓練を受けています。それもかなり高度なのを。ですから、ご心配なさらずに」

「……………」

やっぱルーフェイア、殿下になんだか言ったらしい。で、殿下の方もお気に入りの美少女に言われたから、考え改めたんだろう。

単純。

けどどこまで変わるとか、いったいなんて言っただらね？ まああとで落ちついたら聞いてみるかな。

ともかくこんなとこに長居してたら、ロクなことにはならないはずだ。スラムにいた時もそうだったけど、ヤバいところからはさっさとズラかるに限る。

「ともかく行きましょう。長居は禁物です」

エレニア先輩も同じことを言って、暗がりの中、建物から急いで離れる。

中じゃ、何か騒動が始まったっぽかった。なんか聞こえた銃声は、ミルだろう。

ただ、次は予想外だった。あたしが見てる前で、建物が崩れ出す。

「ちょっと待ちなよっ！」

思わずそう突っ込んだけど、それで崩れるのが止まるワケがない。ただ、2人ばかり、人影が飛び出てきたのはわかった。

舞い上がる土煙を透かして、誰だか必死に見極める。

「ナティエス、ミルっ！！」

いつも一緒にいるんだ、すぐにわかる。

ざっと辺りを確かめたけど、敵はいなさそうだったから、そっちへと走った。

「大丈夫かい？！」

「うん。ルーフェイアの魔法でね、なんでもなかった……あれ？よく考えたらシーモアも殿下も、なんでまだここにいるの？」

いや、こっちもさっさと帰る予定だったんだけどね。

んであたしが説明しようとしたんだけどさ、殿下の方が早かった。

「お前たちを残して逃げるのは、卑怯だと思ったただけだ」

「殿下……熱、ありません？」

ナティエス、ナイスなりアクション。殿下の額に手をあてて、熱計ってるよ。

「あなたたち、それどころじゃないでしょう……」

「え？ あっ！！」

どうも殿下の妙なペースに巻き込まれて、大事なことを忘れてた。

シルファ先輩と、ルーフェイア。

無事だとは思っけどさ……。

だからあたしは、聞いてなかった。殿下とミルの会話を。

## Episode:60

Louwell

「で〜んか」

「なんだ」

薄い水色の瞳をくるくるとさせて、シエラから来ているひとりが、声をかけてきた。

名前は確か……ミルと言ったはずだ。

「ルーフェイアにさ、なんて言われたの？」

この少女は苦手だった。あまりにも突拍子がなくて、ペースが乱される。

親の顔が見てみたいと思う。

「お前に言っいわれはないな」

「あ、そ。けどまあ、学院の孤児の話でも聞いたんだろな」  
「ずばりと言われた。」

「聞いて、どだった？」

「どうと言われても……」

クスクスと、含みを持たせて笑う様子がカンに障る。

「うふふ、言わなくていいよ。ここにいるんだもん、ルーフェイアの言いたいこと、わかったんでしょ。」

「やっと殿下、自分の立場わかったんだ」

「立場？」

「何のことかと考え込む。」

「そ、立場。殿下、フツと違うのが自慢でしょ」

「違うと言っても……」

言いかけて、考え込む。

確かに自分は庶民ではない。生まれたときから明らかに違う。だが、それがどう違うのか、自分でも分からなくなっていた。

下衆な庶民とは住む世界が違うのだと、以前のように思えない。依然として背負うもの、与えられたものは確かにあるが、見下していたはずの者と、驚くほどに距離がなくなっていた。

「そうか、立場か　そうかもな」

なんとなく、そんな言葉が口を突く。

「私、思っんですよね」

「？」

この少女の口調が一変した。

「権力は、けしてタダではないと。果たすものを果たして、初めて釣り合うものじゃないかと。

だからそれを怠ったら、それだけのものはね返ってくるんじゃないかしら？」

なめらか過ぎるアヴァン語、上流階級特有の言いまわし、不思議とわかつているような言い方。

「所詮自分で手に入れたわけではないもの、地位も権力も。ようするに借り物よね。だから返す時に、利子がないようにしておかないと。

それを勘違いして振りまわしても、みつともないだけだと思うわ」

「お前……誰なんだ？」

「さあね。でも、名前くらいは教えといてもいいかな？」

再び口調がもとに戻る。

「ミルドレッドセルシェマクファディ……じゃない、ミルドレッドセルシェハワールドナエドイルって言ったら、わかる？」

「なんだと……！」

血の気が引くとは、このことだろう。だが当人は、気にした様子はない。

心配そうに、崩れた館のほうに視線を向ける。

「ルーフェイアとシルファ先輩、大丈夫かなあ？　きっと、大丈夫だと思うんだけど……」

## Episode : 61

Sylpha

ルーフェイアの魔法に巻き込まれ、ミルから弾を食らった男の形相は、歪んでいるとしか言いようがなかった。

「……そうか、そういうことが……貴様ら親子で……それなら……」  
執念としか言いようのない声で、ヴィクターズという男は言う。

なんなんだ、この男は。

一瞬寒気を覚える。

その時、自分たちに魔法がかけられるのに気付いた。  
最強の防御魔法。ルーフェイアだ。

だが、微妙に不安定だ。同じ魔法を同時に幾つもかけられるのは驚きだが、そのせいで完全には行かないらしい。

だとしたら、これ以上は……。

思わず少女の方を振りかえる。私とミル、それにナティエスにはかかっているが、この子はまだのはずだ。

同時に天井に、大きく亀裂が入った。

バカっ！

魔法もなしに直撃を受けたら、いくらルーフェイアとて助かりようがない。

とつさに精霊ヴァルキュリアを、憑依状態に持つて行く。通常の数倍に引き上げられた体機能で床を蹴り、少女の上に覆い被さった。華奢な身体が傷つかないよう、しっかりと抱え込む。

かなり大きな破片が降り注いだが、ヴァルキュリアが憑依状態にあるのと防御魔法がかかっているのとで、なんなく弾き返す。

長かったようだが、実際にはさほど長くなかったはずだ。気付くと、静寂だけになっていた。

身体の上にのしかかる瓦礫をはねのけ、続いて抱えていたルーフェイアの手をひいて立ち上がらせた。幸い怪我をした様子はない。だが、それで済ますことが出来なかった。

「なんてムチャをするんだ！ 怪我でもしたらどうするっ！」  
思わず叱りつける。

「ただでさえ華奢なのに、ルーフェイアが魔法なしで、無事で済むわけがないだろう！」

「……すみません……」

ほんとうに悪いことをした、そういう表情でルーフェイアが謝る。我ながら甘いと思うが、ついそれ以上言えなくなった。

ことの是非はともかくとして、この少女が私のことを考えていたのは、間違いがないのだ。

「いや、私もつい……すまない。だがどうして、自分にかけなかった？」

私が精霊ヴァルキュリアを憑依状態にして乗り切れることは、この少女は知っているはずだ。なのになぜ、自分を犠牲にしてまで私に魔法をかけたのか。

しかしきつく言ったのがまずかったのか、答えようとしない。

「……聞かせてくれないか？」

重ねて尋ねる。綺麗な色の唇からようやく、言葉がこぼれた。

「その……タシユア先輩には、シルファ先輩しか……いないから……」

「ルーフェイア……」

いったいどこで知ったのだろう？　まるで兄と姉とを追いかけて歩く妹のように、私たちを慕っているだけのことはあった。

それにしても本来なんの関係もない他人を、なぜこうも慕うのだろうか。

戦場での経験の、反動なのか。そう思うと、この少女が可哀想になる。

「ともかく、もう2度とするんじゃない」

「……はい」

うつむいたままの少女の頭をなでてやると、やっと顔を上げた。

「先輩、ルーフェイアっ！」

みんなと……そして殿下とが駆けてくる。

「2人とも無事か？」

殿下の言葉に、「おや」と思った。お気に入りだったルーフェイアだけではなく、私のことまで心配している。

「大丈夫です。シルファ先輩がかばってくださいましたから。先輩も……大丈夫ですよね？」

「え？　ああ」

もしかすると何箇所か打ち身くらいつくったかもしれないが、その程度だ。

「僕のために済まなかった。屋敷の方へ医者を呼ぶように言っていたから、戻って診てもらおうといい。

こっちはじき警察が来るから、父にまかせておけばいいだろう」  
ルーフェイアと2人、思わず顔を見合す。

（先輩、殿下へんですよね？）

（ああ……）

思わずこつそりそんな会話を交わしたが、理由はわからなかった。  
いずれにせよ、いったん屋敷へ戻るのが賢明だろう。

「よし、戻るか」

「了解！」

後輩たちの声が揃った。

## Episode : 62 完了

R u f e i r

「よ。どだったんだ？」

「あ、イマド」

あの大騒動から1週間ほどして、あたしたちはようやく、学院へと戻ってきた。

ちなみにいきなりテロで始まった建国祭のほうは、殿下の誘拐事件に絡んで首謀者が捕らえられた　ただし重体　こともあって、警備は強化したもののそのまま続行された。

さすがに伝統ある国なだけあって、雅やかな式典のオンパレードだった。

殿下、どうしてるかな？

救出後どうしたわけか殿下のあたしたちへの対応は完全に変わって、警備を兼ねながら、あちこち連れて行ってくれたりした。

別れぎわに来年の建国祭にもみんなで来るよう、ずいぶん説得されたし。

けど肝心の学院の方は、授業のレポートがたまっていたりと、楽しんできたツケが回ってきている。

みんなで手分けしてやれば、早いかな？

ただそうすると、こういうわけかあたしの分が多くなる。

「数学と物理、まとめといてやったぜ」

「ほんと？　ありがと」

何事も手回しのいいイマドが、ノートを差し出した。開いてみる

と確かに、休んでいた間の授業が、わかりやすくまとめてある。  
でもざっと最後まで見てみて、敵地で包囲された気分になった。

「こんなに、進んじやったの……」  
追いつけるかどうか自信がない。

「教えてやるって。それよりなんか、アヴァンじゃ大変だったらしいな？」

「ううん、たいしたこと、ないの。ちょっと誘拐されただけ」  
言った途端、イマドが呆れ顔になる。

「おまえなあ、誘拐をんな簡単に言うなって」

「え？ でも、たいしたこと、なかったし……」

閉じ込められたうちにも入らないような誘拐なんて、物の数にも入らないだろう。それよりもあたしとしては、爆弾テロのほうが許せなかった。

「もう、あんなこと……ないと、いいんだけど」

「ホントだな」

そこへシーモアたちが来た。

「イマド、話してるとこ悪いね。ルーフエイア、ほらこれ」

「へえ、似合ってるな」

彼女が差し出したの、例のみんなでドレスを着た時の写影だ。

「シーモアも別人みたいだな。っててめえ、危ねえな、殴るなよ！」  
「自分の言葉に責任くらい、持つんだね」  
「なんだかちょっと腹が立つ。」

イマドもイマドだけど、シーモアもシーモアだ。何も殴ったり、  
しなくていいのに……。

「これ、シルファ先輩か？ よくあの先輩が、こんなもん着たなうたいして痛くもなかったみたいで、また写影を手にしたイマドが感心する。」

でも中央に写るシルファ先輩、ほんとにどこかの令嬢みたいだ。

そうだ。

いいことを思いつく。

## Episode : 63

「ねえ、これ……余ってる？」

「ん？ ああ。知り合いの先輩に頼めば、何枚でも焼いてくれるよ」

「じゃあ、ひとつ余計に……もらっても、いい？」

そう訊くと、シーモアがうなずいた。

「でも、どうするのさ？」

「えっと……タシユア先輩に、あげようと思って」

なんとなくだけシルファ先輩、ドレスを着たなんて、言わない気がする。

こんなに綺麗なのに。

透明な板 昔は球状だった の中に浮かび上がる、ちょっと  
恥ずかしそうな先輩。いま見ても、薄紫のドレスはとっても似合っ  
てる。

それを手にして立ち上がった。

「泣かされんなよ」

「だいじょうぶ、先輩……いい人だから」

突っ込むイマドにそう答えて、教室を出た。  
少し離れた、先輩の教室のところまで行く。

いるといいんだけど。

そつと入り口から覗きこむ。

けど、教室にあの銀髪の姿は見当たらなかった。授業はこれから  
始まるのに、さぼってどこかへ行ってしまったんだろうか？

「そんなところで、なにをしているのです？」

「！」

突然後ろから声をかけられて、心臓が止まりそうになった。ほんとにこの先輩、全く気配がないから怖い。

「通行の邪魔ですよ。用事があるなら誰かに頼んで、廊下で待つべきでしょう」

「すみません……」

なんだかいきなり叱られる。

「それで、なんの用ですか？」

「え、あの……」

思わず萎縮して何も言えないでいたら、またもや後ろから声が飛んだ。

「えっとですねえ、おみやげです」

嬌声の主は、もちろんミル。

どっから湧いたんだろう？

しかもいきなりあたしの手から写影を奪って、タシユア先輩へと差し出す。

「おや、わざわざありがとうございます」

うそ……。

あっさりと受け取った先輩に、言葉が返せなかった。

きっと何か一言、言われると思ったのに。

「素直に受け取るとは思っていなかった、とでも言いたげですね」

あたしの表情に気付いたらしくて、先輩がそんなことを言う。

「あ、いえ、そんなつもりじゃ……」

「後輩の好意を無駄にするほど、人間ができていないわけではないわけではありません。せっかくだからね、ありがたくいただきます」

あまりにも素直（？）な反応に、どう言っているかわからない。それにどこもなく言い訳めいて聞こえるの、気のせいだろうか？ただ、迷惑がってるようにはみえないからほっとする。

「すみません、それだけで。本当はもう少し、着たんですけれど……先輩、写そうとすると、逃げちゃって」

「シルファらしいですね。さて、授業が始まりますから、あなたたちも教室へ戻りなさい」「はい」

あの綺麗なシルファ先輩を、見せてあげられたのが嬉しくて、軽い足取りで教室へと戻った。

## Episode: 64

Sylpha

授業が終わって、私は真っ先に図書館へと足を向けた。夕べは遅くなってからここへ着いたので、学年が違うタシユアとは、帰ってきてからまだ会っていない。

奥のテーブルに、見慣れた姿を見つける。

「タシユア」

「お帰りなさい」

まるでちよつとどこかへ出掛けていただけのような言い方が、いかにもタシユアらしかった。

「これを、返そうと思って。　　ありがとう、役に立った」

そう言っ借りにいたダガーを差し出す。使う機会はあまりなかったが、手元にあったお陰でとても安心だった。

傍にタシユアがいるように。

「そうですか、それはなによりでした。アヴァンではいろいろあったようですね」

「ああ」

どこからどう話していいか、わからないほどだ。

どう切り出そうか考えていると、タシユアが先に口を開いた。

「そう言えば、今回は珍しい格好をしたようですが」

「珍しい格好……？」

「なんのことだろうか？」

「パーティがあるとかで、ドレスを着たのでしょうか？」

スカートが苦手なあなたにしては、珍しいと思いますが？」

「……なっ、どっ、どうしてそれを?!」  
突然言われてうろたえる。

「今朝、ルーフェイアとミルドレッドが、写影を持ってきてくれましたよ」

そう言ってタシユアが差し出した写影は、確かにあのアヴァンの屋敷でみんなで撮ったものだっただけ。

薄紫のドレスを着た自分が、中央に浮かんでいる。

「だっ、ダメだっ! そんなの! !」

慌てて手を伸ばす。こんな格好をしたものを、タシユアに持っていてもraithたくない。

「おっと」

だがタシユアのほうが一瞬早く、ひょいと写影を引っ込めた。

「あつっ……」

勢い余ってテーブルに顔から突っ込む。

「そんなに机が好きだとは、知りませんでしたよ」

「誰のせいだ!」

見ればタシユアの顔に、意地の悪い笑みが浮かんでいた。私の様子が、よほど面白かったらしい。

彼のいじめ癖は今に始まったことではないが、それにしてもどうしてこう、ひねくれているのだろう。

「それにしてもスカート嫌いのあなたがよく、ドレスを着る気になりましたね?」

「いや、それが実は……」

訊かれて、ナティエス以下後輩たちに、脱がされかかったことを

話す。

正直あれがなければ、絶対に着なかった。

「おやおや、困った後輩たちですね」

口ではそう言っているが、話を聞いたタシユアは、完全におもしろがっていた。

目の前で同じことがあっても、ぜったいに止めてくれないだろう。それどころか、よけいに煽りそうだ。

「……何か言いたいのだろうか？」

ついそんなことを口にする。

## Episode: 65

「何をひがんでいるのですか？ 困った人ですね。

よく似合っています。綺麗ですよ」

「え？」

今確か、「綺麗」と……？

騒がしい後輩たちを除けば、そんなことを言われたのは初めてだった。

驚いてタシユアの顔を見る。

その顔に、優しい微笑みが浮かんでいた。

急に胸が熱くなる。

「……ありがとう……」

なんだかタシユアの顔を見ていられなくて、下を向いた。どちらも黙ったまま、時間だけが過ぎる。

「あゝ、シルファ先輩いたいたあ」

「ミルドレッド、場所をわきまえてもう少し静かになさい」

静寂を破った嬌声に、間髪入れずにタシユアの叱責が飛んだ。

もともと、ミルに効くとは思えないが。

あの子を止められるものが、この世に存在するとは思えない。

見ればルーフェイアをはじめ、シーモア、ナティエス、ミルの4人組が、仲良く入ってきたところだった。

「すみません……」

「ルーフェイア、あなたが謝ることではないでしょう？」

「え、すみま……あ……」

何故かミルの代わりに謝ったルーフェイアに、今度もタシユアが容赦なく突っ込む。

この子達に、さっきのタシユアなど想像もできないだろう。

「ルーフェイア、黙ってたほうがいいんじゃないか？ どうせ墓穴掘るだけだろうしね。」

シルファ先輩、これを届けにきたんです」

4人の中ではリーダー格のシーモアが、私に写影を差し出した。

「あ」

「おや」

つい2人で、そんなことを言ってしまう。なにしろたった今、取り合いをしていたのと同じものだ。

「あれ、いらなかったですか？」

「え、あ、いや、その……」

何も知らない後輩に、うまく言い繕えない。

「もらっておいたらどうです？ せっかく後輩たちが持ってきてくれたのですから」

「ああ……」

タシユアに言われて、しぶしぶ写影を受け取った。

だが 周囲に写る後輩たちの、嬉しそうな微笑み。

「そういえば、お礼をしないといけないんだったな」

「あ、ケーキ……作って、頂けるんですか？」

最初の約束をちゃんと覚えていたのだろう。ルーフェイアが嬉しそうな声をあげる。

「なにになに？ シルファ先輩のケーキ??」

「え、ほんとなの？ うわあ、ルーフェイアいいなあ」

「うーん、食べてみたいね」

他の後輩たちも騒ぎ始めた。

それを見て、思いつく。

「そうしたら……今度の休みに、腕によりをかけて作ろう。みんな  
で好きなだけ、食べるといい」

可愛い下級生たちの顔が、ぱっと輝いた。

「それって、お腹いっぱい食べていいってやつですか？」

「ああ。たくさん作るから、手伝ってくれないか？」

4人が顔を見合わせる。

「やったあ！！」

図書館中に、歓声が響き渡った。

F i n

お知らせ

明日10/18より、第9作の連載に移ります。

いつもどおり“夜8時過ぎ”の更新です。

第1話は「小説家になろうで検索」「筆者サイト」等で、よろしく  
お願いします

あとがき

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。  
感想・批評大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8569e/>

---

力の行方 ルーフェイア・シリーズ08

2011年2月7日11時39分発行